

攻めろ！！千聖さん！！

面心立方格子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私、白鷺千聖と、世間に疎い彼との話。

基本的にはのぼのぼのしています。多分僕には純愛とかとても濃厚な恋愛ストーリーは書けないので、独自の道を作ります。あまり自信はありませんが。基本的『白鷺家のお兄さん』で出来なかった部分を考えて書いていく感じですね。

白鷺家のお兄さん

←

<https://syosetu.org/novel/205692/>

目次

朝からきついつす	1
昼間は昼間で	7
夜の御奉仕	13
着物姿と生け花はどうですか？	20
学生あるある、大事な時の放送はうるさ	28
い	
白鷺さんのご友人	35
要件変わってない？	39
乙女心、勉強	47
補習回避に全力を（政治家風）	55
全力投球	61
恋愛コンサルタント	68

いぎ服買いへ	78
心清らかなれば	91
中間考査	99
補習の時だけ異様に優しい先生	107
宿泊研修1日目：しょうがない事もある	120
よね	128
宿泊研修1日目夜：相見える	

朝からきついつす

「風人くん、起きなさい。」

「ん……」

「全く…… 相変わらず寝坊助さんね。こうなったら……」 ガシツ

「ん……？」

「起きなさい!!」 ブアン

「ひでぶ!!」

衝撃と共に目が覚めた。どうやら『また』投げ飛ばされたらしい。

「あいてて…… お願いだからもう少し平和な起こし方をお願いできませんか、白鷺さん。」

「風人くんが起きないからよ。」

「いやね白鷺さん、寝具というのは冬のこたつとは違って季節関係なく人類が勝てない敵なんですよ。皆そう思いますよ、ええ。」

「何一人で勝手に納得しているのかしら…… とにかく起きなさい。朝ごはんの準備は済ませてあるから。」

「あ、ああ……ごめんなさい。」

お初に御意を得ます。僕は風野風人。あだ名は『暴風』。理由は風が名前に2つあるからである。一応武道をたしなんている家の跡取りだよ。朝4時に起きて、涼しい中で2時間稽古をして、朝日を見て少し休憩して二度寝をしている生活習慣がちよつと墮落しているけどね。そして

「風人くん、ご飯粒ついてるわよ。取ってあげるから少しじつとしててね。」

「は、はい。」

このまるで奥さんのような立ち位置をしているのは白鷺千聖さん、中学からの知り合
いである。

「白鷺さんも、疲れるだろうから別に無理して来なくてもいいんだよ。あの約束の事も忘れていいし。」

「ふふつ、そんな冷たいことは言わないの。私が個人的に風人くんの為にやっているんだから気にしなくてもいいのよ。」

約束とは…… まあありがちなことで、中学の時に白鷺さんが反感を買ったのか、とある男子生徒が白鷺さんに殴りかかっていたので止めて仲裁をしたのである。その時に「何かお礼がしたいの。」と言われたので「じゃあ朝起こしに来てくれる？」と頼んだ

のである。そしてそれがあれこれ4年経っている訳で……

「それに風人くん、今日は朝から剣道部の練習を見てあげるんじゃないかなかったのかしら？」

「え…… ということはその為だけに速く来てくれたってこと？」

「ええ、そうよ。風人くんは稽古の時や武道に関しては忘れないのに、その他がまるで駄目なの。」

「なるほど…… 申し訳ない。家が隣とはいえいつも来てもらって。」

「気にする必要ないわ。なんかこの生活にも慣れてきたし。」

「それなら…… でも無理はしないでよ。なんか働かせてるみたいだから少し罪悪感も湧くし……」

「それならちゃんとして起きて欲しいわね。」

「ぜ、善処します……」

因みになぜ白鷺さんが下の名前で呼んでいるかという点、単にご近所付き合いをしていて、僕の両親が海外でジャパニーズ侍か何か知らないけどそっち系の活動をしているため、風野さんだとよそよそすぎるから、とのことである。

「じゃあ、皿は自分で片付けるから白鷺さんは自由にしてて。」

「分かったわ。」

そして朝投げ飛ばされるのと同時に、僕にはもう一つ苦難が待っている。それが何かというところ……

「風野くん!!」

「な、何?」

「また制服が乱れています…… 今日も白鷺さんに起こしてもらったのですか?」

「はい、その通りです。」

「随分と清々しいわね…… 整えてあげますからじつとしていてください。」

この風紀委員、氷川紗夜さんである。高校1年の時一緒のクラスだったのと毎回のように この検査に引っかけり、直されるため周りから見られて恥ずかしいのである。一応弓道の基本を氷川さんに教えたのは僕です。

「演武や大会の時はあんなにちゃんとしているのに…… どうして日常がこうなんですか。」

「そういうギャップがあってもいいんじゃないかな。堅苦しいのもあれだし。」

「そんなギャップは必要ありません!!」

「す、すみません。」

「…… 直りました。ちゃんとしてくださいよ。」

僕もなるべくちゃんとしているんだけど、どうにも制服を着るのが苦手で、どちらか

といえは着物を着る方が得意である。だつてさ、5歳から着物を着ているのに、この制服は13歳から着ている。つまり歴が違ふんだよ。

「おはよう、紗夜ちゃん。」

「おはようございます白鷺さん。いつもご苦労さまです。」

「ええ…… また風人くん、制服乱れてたの？」

「はい、いつも通り直しました。でももう慣れていきますので。」

「ふふつ、私も風人くんを起こしに行つて、朝ごはん作るまでの流れがもう染み付いてしまつてるわ。」

「白鷺さんはもう風野くんのお嫁さんみたいね。」

「え、お、お嫁なんて…… 紗夜ちゃん、気が早いわよ♪」

「やはり風野くんが世間知らずだから白鷺さんも気を許せるのでしようね。」

「ええ、風人くんは私が女優ということも知らないから気兼ねなく話せているわ。」

「前までシャーペンの存在を知らなかった人でしたからね……。」

そう、風野くんの最大の弱点は恐ろしい程に最近のものが分からないこと。以前遅刻した時に遅刻届けを出しに来た時はまさかの全部が達筆な草書体で提出されたくらいだから…… シャーペンの存在も最近気づいたみたいだし。

「じゃあ、私も日直の仕事があるから失礼させてもらうわね。お仕事、頑張つてね、紗夜ちゃん。」

「はい、ありがとうございます。」

昼間は昼間で

ちなみに前回言い忘れてたかもしれないけど、決して花咲川女子学園は共学化の道を取っている訳では無い。僕はある意味外部顧問のような形で呼ばれて、学校では書道の教師をしている傍ら、未成年として学校側が出す課題もやっている。つまり教師兼生徒と言っわけだ。ちなみに剣道部、華道部、茶道部の顧問もやっている。全部嗜んでるからね。なので休み時間は教員室というね、緊張感しか湧かないところにいるんだよ。

ガラガラ

「失礼します!!1年の若宮です!!上様はいらっしゃいますか!?!」

「はあ……」

僕は若宮さんの方に歩いていき、毎度毎度こう言う。

「若宮さん……何度も言うけど僕は上様でもなんでもないからね。」

この子……若宮イヴさんはかつてとある会場で僕が演武をしたり、殺陣をしたりしたところを見て、その後上様とずっと呼んでいるのである。

「上様!!昼練をしましょう!!」

「あー、はいはい。じゃあ先行って準備しておいて。」

「押忍!!」

体育館

「じゃあ追い込みからやるか。どうぞ。」

「はい!!めーん!!」

若宮さんは剣道を初めて、まだ素振りと足捌き、切り返しと基本的な練習をメインにやっている。

「若宮さん、切り返しは一息で。」

「はい!!はあ……はあ……」

「あと切り返しはまずは大振りでもいいよ。まずは丁寧に。それから速く。ちよつと形から入ろうとしている部分があるからね。」

「はい!!でも動画のようになるのも難しいですね……」

「動画?何それ?」

「……え!?上様は動画を知らないのですか!?!」

「うん。申し訳ないけど。」

「じゃあ……」ガサゴソ

若宮さんが自分の荷物の中から何かを探っている。それと同時に……やけに薄い板を出した。あれはよく高校生が使っている物だな……確か、なんだっけ。

「これです!!」

「すこい、人が動いている…… ああ…… これ協会の人だね。」

「知っているのですか?」

「僕も有段者だし、それなりに偉い人達とも時々出稽古をしたりもするよ。まあ大半は親父の知り合いなんだけどね。」

「そうなんですか!!」

「さっきの速い切り返しはやっぱ経験からきてるよ。まずはじっくり、基礎を叩き込まないとね。」

「はい!!上様!!」

「だから…… 上様っていうの辞めてくれない?」

「嫌なんですか……?」

「え……」

あれ? 僕何かまずいことでも言ったかな……

「すみません、私、気付かない間に先生を傷つけていたのですね……」

「あ、いや、別にそういう訳じゃなくて……」

「違うんですか……?」

「あの、あのね。僕は別に上様とか呼ばれるほど偉くないからさ……それに若宮さんとは、茶道も華道でも上様だと不自然だからさ……普通に名字とかで読んでくれた方がいいかなって。そっちの方が場合分けしなくて済むでしょ?」

「……なるほど!!では、フート師匠でいいですか!」

「うーん……いいよ。」

「やったー!!ありがとうございます!!」

「とりあえず昼休みも時間が来そうだから、そろそろ着替えて教室に戻ったら?」

「そうですね!!ありがとうございます!!」

「ありがとうございます。……さて、手入れするか。」

あとは体育館を雑巾がけして屋上で少し心を落ち着かせるか。

この学校の屋上は非常に静かで心を落ち着かせながら色々なことができる。

「ふんふくん♪」

「あれ?白鷺さん?今は授業中のはずでは?」

「風人くんに逢いに来たのよ。」

「それなら戻って授業を……」

「それに風人くんにも聞いておきたいことがあったから……」
「聞いておきたいこと？」

「ええ、さつきイヴちゃんと稽古をしていたでしょ？」

「はい。そういえばさつき入口近くで見えていましたね。」

「(なんでバレてるのかしら……) それで、イヴちゃんから何か見せてもらったの？」

「何か？ ああ、動画というものを見せてもらいましたよ。まあそこに映っていたのは知り合いですけど。」

「(まさか…… 私?) それはちなみに？」

「日本剣道協会の人だよ。親父の知り合いもいた。」

「なるほど…… ならいいわ。(私が女優だと知られてないなら……)」

「? まあいいや……」

「…… ねえ、風人くん。」

「ん? どうかしましたか？」

「その…… 今度の休日にね…… デ……」

「デ？」

「デ…… デ…… 出稽古に行きたいの!!」

「出稽古? …… 白鷺さん何かたしなんているの？」

（しまった!!デートつて言うつもりが、まさかの2週間後の出稽古と言い間違えた上に誘うだなんて…… 不覚だわ。）

「え、あ、いや……」

「もしかして…… 白鷺さんも外の出稽古を見てみたいの?」

「へ?」

「あ、いや。出稽古に行くつて言うから、てつきり何か見たいものがあるのかと。えつと次の出稽古というか指導は……」

「2週間後よ。」

「あ、そつか。じゃあ今度の週末に何かあったつて…… じゃあ白鷺さん。武道とは行かないかもしれないけど、どこかと交流出来るように頼んでみるよ。」

「あ、ありがとうね。」

（はあ…… また誘えなかったわ…… でも、風人さんの純粋さには敵わないわ…… そこに惚れたつて言うのもあるのだけだね。）

「じゃあ手入れも完了したし、今日はするべきことを終えているから帰るね。」

「え、ええ。また明日。風人くん。」

夜の御奉仕

「はい、あ〜ん♡」

「白鷺さん、さすがに自分で食べられるから……」

また明日と言つてたはずなのに夜になつたらいつの間にか家にいたのだ。あれおかしいな…… どうなつてるんだ。

「今日は予定があつただけ、キャンセルされたから来たのよ。」

「そうなんだ…… でもごめんね、白鷺さんが来るとは思つてなかつたから夕食を一人分しか作つてなくて……」

「気にする必要は無いわ。私はもう食べてきてるから。」

白鷺さんは僕の隣に座り、体を寄せ、左手で僕にご飯を食べさせようとしている。僕的にはあまりにも距離が近くて少し緊張してしまうのだが…… 本人は至つて幸せそうなので何も言えないのである。

「?..どうかしたのかしら?」

「いえ、何も……」

僕の家は親父が大分偉い役職にいたのもあつたのか大分広く、今食事を取っている居

間も2人にしては広すぎるくらいの空間である。ただ白鷺さんが持つている箸と食器が当たる音、そして庭にあるししおどしのカラン……という音しかないととても静かな空間である。

「今日はこれからどうするの?」

「今日あったことを日記に書いておくことくらいかな。今日は特に誰かが訪問をしようといたす予定もないし。」

「そう……(ということとは今夜は2人つきりになれるのね……)」

「とりあえず食器を片付けたら風呂に入ってくるよ。」

「分かったわ。」

そして白鷺さんは1度家を出ていった。やる事が無くなったから家に帰ったのだらうか……

千聖目線

お風呂……風人くんのありのままの姿を拝める……今まで風人くんの風人くんは何回も見てきた……その逞しい体、そしてその体に似合わない幼げな顔……全てが愛しいわ……どんな反応をするか、楽しみね。

千聖母「千聖、タオルと着替えを持ってどこにいくの?」

「風人くんの家のお風呂に入ってくるの。」

「羨ましいわね、風野さんのお家のお風呂って、凄い広かったんでしょ？」

「ええ、凄いわよ。お母さんも入りに行かない？」

「辞めておくわ。また、火凧さんが帰ってきた時にでもお邪魔させてもらおうわ!!」

「ふふっ、お母さんと火凧さんは仲がいいものね。」

「ええ、じゃあ風人くんに迷惑がかからないうちにいつてらっしやい！」

「ええ、行ってくるわ♪」

風野家

「風人くんは…… お風呂に入っているわね。」

風人くんの家のお風呂は旅館の温泉そのもの。本人が言うには「奨励会の方々や来賓の方の為に広く作られている」って言っていたわね…… それを實現できる財力が怖いわ。

「準備は…… 出来たわね……」

私は服を全て脱ぎ、タオル一枚で体を覆った。これなら…… 大丈夫よね。

「ふ・う・と・くん♪」ダキッ

「ほわ!!白鷺さん!!」

やった!!私の奇襲は成功したわ。風人くんもまさか私が入ってくるとは思わなかったのか啞然としている。この風人の温かさ。。。癖になるわ。抱き枕にはピッタリね……

「こ、ここ男湯だよ!!間違つてない?」

「いいえ、間違つてないわよ。」

「そ、そう……」

事態を想定出来ていなかったのか頭が混乱しているのか風人くんの顔が赤い。

「ふふつ、風人くんも意外と初心なのね♪」

「だって男湯に女性が入ってくるなんて予想出来ないよ……」

そう、私も初めての挑戦だった。今までは女湯で体を洗って、火照った状態で風人くんにアプローチをかけていた……。けど風人くんは「のぼせたの!!」と焦つて水を持つてくるばかり……。このままではいけないと考えた私は今日、実行することを決意し、実行した。こんなこと撮影でもやったことは1度も無いけれど。。。良かったわ。

「体を洗ってあげるから、少しじつとしててね♪」

「え、ちよつと……」

制止しようとする前に私はタオルにボディソープを付けて風人くんの体を洗う……風人くん、私の谷間をみてもいいのよ。無いなりに頑張つて寄せてるから……男の子はこういうのが好きつてきたことあるから……

そして風人くんの体を洗う……なんでこんなに肌が綺麗なのかしら。体は鍛えられていてるのに肌を触つていて全然そんな感じがしない。

「し、白鷺さん、くすぐりたいよ……」

「あら、ごめんなさい♪」

つつい風人くんの体を指でなぞっていたわ。それくらい肌が綺麗なもの……体の細部まで洗い終わってシャワーで落とす。ここら辺の整備はかなり現代的なのね。まあ来賓の方々の中には外国の方々もいらつしやるからそれを考慮した上なのかしら……そして私も自分の体を洗い、一緒に湯船に入る。

「あの……白鷺さん。」

「どうかしたの?」

「その、色々やってくれるのは嬉しいんだけど……僕つてどこかで白鷺さんに何かしたの?」

「……え?」

「その、僕は朝起こして欲しいって頼みはしたけどそれ以外は白鷺さんの恩義から来て

いるものでしょ…… だから、もしかしたらどこかで…… 僕にはそういう態度で居な
きやいけない、って狭い思いをさせてるのかなって……」

「…… 要は、風人くんという存在が、私にとっては奉仕の対象として見なされているっ
てことかしら？」

私にとつては聞き捨てならない話だった。もしかして風人くんには…… 私が色々
するのはむしろ邪魔になっているんじゃないか……

「そう…… 変に恩を着せてしまってるんじゃないかなって思つて……」

でも次の一言でその曇りも晴れた…… 風人くんは優しすぎるわ。私がやりたいま
まにやっているだけなのに…… その責任が自分にある、だなんて

「…… 心配はしないで。私は、ただ自分のやりたいようにやってるだけ。風人くんに
縛られている訳ではないから安心して……」

「…… 白鷺さんがそう考えてるなら…… 少し安心した。」
風人くんの目も晴れて安心した。

「すう…… すう……」

風人くんも風呂でかなり緊張していたのか、寝室に入り、私が膝枕をする間もなく寝

てしまった。よつぽどお風呂で緊張していたのね……

「寝顔も、可愛いわね……」

その寝顔を見て……私は大きな充足感と……大きな不安に襲われた。これが思春期つてもものなのかしら……もし風人くんが、私が女優だと知ったら……この関係はどうなるのかしら。風人くんは女優だからと私を特別扱いや敬遠をしたりするのかしら……不安で仕方がない。今の私は、好意を向けていると同時に、客観的に見れば風人くんにはばれないように敢えて接しているようにも見える。このまま……知らないままでもいいかというと……そんな悪意めいた物があるようにも感じる……どうすればいいの。

着物姿と生け花はどうですか？

出稽古というわけにはいかなかったが、華道の交流をすることは出来た。先方の希望もあつてか話がすぐにまとまつた。

「どう？ 風人くん、似合うかしら？」

「はい、可憐な雰囲気が出ているよ。」

白鷺さんも参加するということで赤色に菊の花柄が入った着物を着て、髪を纏めていゝる。何故か僕に着付けをして欲しいと頼まれたので一通り終わらせた。本人も満足気なので良かった。

「白鷺さん、最初の挨拶に同席する？ 僕と美竹さんで挨拶しなきゃいけないんだけど……。」

「そうね…… 私は蘭ちゃんが同席しているなら行くわ。」

「知り合いがいるの？」

「ええ、一緒にガールズバンドパーティーを開いたこともあるの……。」

「バンドってなんだ……。」

「知らないわよね。ごめんなさい、忘れてくれていいわ。」

「あ、そうなの…… 話してるうちに着いたね。」

美竹家

「本日はお誘いを受けていただきありがとうございます。私は風野風人ともうします。」
「いえいえ、こちらこそ前々から交流をしてみたいと思っておりますから…… 美竹
です、初めまして。こちらは娘の蘭です。」

「どうも……」

少々たどたどしい。あんまりこの交流をしたくなかったのかな？

「すみません、娘が失礼を。」

「いえ、構いません。ご自由にしていただいた方がこちらとしてもありがたいです
ら。」

「そ、そうですか…… ちなみにお隣の方は……」

「初めまして、白鷺千聖です。風人くんの許嫁です。」

「という冗談です。お気になさらず……」

「むう……」

白鷺さん、そんなむくれた顔にしてもダメですよ。というか美竹さんの娘さんも相当
驚いてるよ。

「では、上へどうぞ。風野さんの生け花を楽しみにしています。蘭、案内しなさい。」
「私も美竹さんの生け花を是非見てみたいです。」

ダン

「ねえ、あんたどういうつもり？」

「は、はい？」

現在、なぜか美竹さんの娘さんに壁においやられています。おそらく白鷺さんの冗談を聞いたからだろう……

「白鷺さん脅してるの？」

「脅し？いえ、単に白鷺さんがこれに來たいと希望を出しましたから……」

「じゃあ、テレビ関係？」

「テレビ？なんですかそれ？」

「とぼけてるの？」

「いえ、そういう訳ではないですしテレビって何ですか？」

「あれ。」

「あれ…… ああ、あの黒い平たい物体のことをテレビと呼んでいるんですね。」

「え…… もういい。」

その後雰囲気悪くして出ていった。何があつたんだらう……

「おや、こんなところにおりましたか。他所の家を散策とは関心しませんな。」

「いえ……少し娘さんと話をしていましたから。」

「そうでしたか。それは失礼。娘は少し難しいところがありますから……」

「そうなんですか。私は父からは分かりやすいとよく言われます。今は海外にいますか。」

「君のお父さんはとても立派な方だと耳にする。それに君のお母さん、風野火凜さんも華道ではとても有名な方でね。」

「そうなんですか……」

「ええ。私も時々参考にさせてもらうところがありますよ。話は反れましたが部屋に戻りましょう。」

別室

「こんなのはどうかしら？」

白鷺さんはあまり多くの花を使わず、質素に生けた。

「この花の向きはどういった感覚で？」

「少し子供っぽいかもしれないけれど、花がこつちを向いているようみ見えない？」

「花が…… 確かにそのようにも見えます。」

「ふふっ、どうかしら？」

「中々良いと思います。美竹さんはどう思いますか？」

「え、あたし…… いいと思う。白鷺さんらしくて。」

「蘭ちゃんが言ってくれるなら、安心ね。」

白鷺さんも華道を楽しんでくれていてるようで安心した。躍動感があってもいいような気がするが…… 初めてなのだからそこまで要求することもないだろう……

「白鷺さん、こいつの許嫁って本当なの？」

「…… そうなれたらなって話よ。決まった訳じゃないわ。」

「お願いだからそういう冗談にならないことは嘘でも言わないでくださいよ……」

（こいつは、白鷺さんが女優だと知ってる上でこういう関係が続いているのかな…… 気にはなるけど関わらない方がいいかな……）

「風人くんが生けたのはどれ？」

「これ。短時間だからあんまり自信はないんだけど……」

「…… 私のと全然違う。」

「白鷺さん、それは歴が違うからです。初めて生けた人とずっと経験してきた人が生けたものでは内容も主張の仕方も全然違いますから……比較する必要なんてないですよ。」

「……凄いですな。とても17の青年の作品とは思えない。」

「17と言っても華道を教えてもらったのは5歳の時ですから……」

「是非とも蘭にも見習って欲しいものだ。」

「……うるさい。」

「……バンドをしてもいいと言ったが、ちゃんと彼のように精進して欲しいものだ。」

「だからやってるって……」

「……なんか嫌悪感が凄いんだけど……」

「止めましょう、風人くん。」

「うん。」

「あの、美竹さん。1度落ち着いて……」

「蘭ちゃんもそこまでよ。」

「……すみません。白鷺さん達がいる前で。」

「そこは別にいいのよ。」

「美竹さん、お気持ちは分かりますがそれで圧力となるような言葉をかけるのはよろし

くありません。それでは娘さんがせまい思いをしてしまうだけです。」

「君は少し黙っていなさい!!」

「ほわ!？」

いきなり美竹さんが平手打ちをかまそうとしてきたので、咄嗟の反応で止めた。一応武道も心得るのでこの程度なら普通に止められる。

「はっ……すみません。」

「いえ……こちらこそ他所の家族関係に首を突っ込むような真似をしてすみません。家の事情は私には分かりません。ですが、それを強要を遠回しにして責めることはたえ後継を育てるためとはいえ、許されないことです。」

(風人くん、落ち着いているようで威厳のある雰囲気を出しているわね……)

「……そうですな。」

その後美竹さんは部屋を去り、白鷺さんがもう一度生けたいと言ったので美竹さんの娘さんと一緒に見守った。白鷺さんのこういう子供っぽいところを見るのは……初めてですね。

—————

夕方

「今日は色々疲れた……」

「ずっと緊張していたものね。お疲れ様♪そして、ありがとう。」

「いえいえ、普段からお世話になってるんだからこれくらい当然だよ。」

「ええ、じゃあ頑張った風人くんにご褒美、あげないとね♪」

そう言つて白鷺さんは僕を抱き寄せた。しばらく母さんと会っていないからかこの温もりがとこか懐かしくて居心地がいい……

(ふふつ、気に入ってもらえたなら……嬉しいわね♪)

学生あるある、大事な時の放送はうるさい

今日は確か昼休みに風人くんが放送に呼び出されて、生徒の質疑応答に答えるっていう内容の放送があつたかしら…… 楽しみね！

「あれ？千聖ちゃん、いつにも増して笑顔だね？」

「ええ、花音も風人くんが何話すか気にならない？」

「風人くん…… あつ、風野くんのこと!？」

そう、この学校では風人くんは私たちとほぼ同い歳の為、風野先生とは言われず、皆からは風野くんと呼ばれている。風人くん自身はそれでいいって言うてるし良いのかしら……

「ええ、そうなのよ。」

「でも、少し心配なところがあります……」

「心配？紗夜ちゃんには何か不安な要素があるのかしら？」

「はい、それは……」

『皆さんこんにちは!!放送部です!!今日は風野先生…… もとい風野くんに来てもらいました!!どうぞ!!』

『…… この密室でそんな大声で話すのですか?』

『え? マイクから全校生徒に発信されるんですよ? 聞こえにくかったらまずいじゃないですか!!』

『マイク……?』

『…… これです。』

「そうだったわね…… 風人くん、そういうのに疎いのを忘れていたわ。」

『まあ先生はそれくらい音量で喋ってくれたらいいです。じゃあ今から質疑応答に入るので答えてくださいね!!』

『あ、はい。よろしくお願いします。』

『まず1通目!! 風野くんは色んな部活の顧問をやっていますが、掛け持ちとかは大変じゃないんですか?』

『いえ、そんなに。5歳の頃から一通り嗜んでいましたから、苦でもなんでもありませんよ。』

「さすが風人くんね。」

「そんなに長く…… 知りませんでした。」

『それでは2通目!! なんで先生は私たちと歳が変わらないのに先生をやっているのです

か?」

「そういえばそ気になってた……千聖ちゃん、知ってる?」

「ええ、知ってるわよ。だって……私が斡旋したんだから。」

「え!?!」

『学校側から日本文化の正しい知識や色々なことを教えて欲しいと書簡にて知らされまして……その後、赴いたのですが、そこで書道の教師を兼任することを義務とした契約をしましたので……。だから、未成年なのですが、教師をやっているんです。実際父のおかげもあってか僕自身はかなり業界にも名が広まっていたので、反対意見は特に出ませんでした。』

「白鷺さんが斡旋したんですね……」

「……本当なら近くの高校に合格してもらって、一緒に通うっていう夢を見ていたのだけれど……風野くん、入試を全部筆で受けちゃって……」

「筆!?!」

「ええ、それでコンピューター採点が厳しいってことで落とされたのよ……でも風人くんの親御さんからは高校生活を経験して欲しいって手紙を貰ったから……」

「親公認の仲なんだね……」

「あ、でもこれは内緒よ。ばれたら後で色々怒られちゃうから。」

『次は3通目!!風野くんから見て、1番親しめている女の子は誰ですか!』

「ふーん……こんな質問する人がいるのね（私が選ばれなかったらどうしよう……）」

「白鷺さん、殺気が漏れていきますよ。」

「千聖ちゃん、怖いよ……」

「あら、ごめんなさいね。（これで名前が上がらなかつたらつてら考えたらと思うと……死んでしまうかもしれないわね。）」

『そうですね……特に親しい……全員ですかね。僕は集団と接する時に誰かを差別するような真似はしたくありませんから。』

（風人くん、教師としてはおそらく満点の返事だと思うわ……けど……）

「あわわ、千聖ちゃん!?大丈夫!」

「大丈夫よ、花音……」

「白鷺さん、一瞬で雰囲気が悪くなりましたね。」

「そ、そうかしら……」

「はい、見たら分かります。」

『では4通目!!風野くんにとって1番楽しい時間っていつですか?』

『楽しい、ですか。やはり皆さんが文化に触れて楽しそうな表情を浮かべた時、でしょう

か。魅力が知られて良かったと心の中で思います。』

『そうですかー……では、最後の5通目!!風野くんが大切な人に言葉をかけてあげるならどんな言葉をかけますか!』

「た、大切な人……（こ、恋人とかそういうことよね……録音しておかないと）」

「風野くんの無茶ぶりされてるね……」

「でも答えには興味があります。風野くんがどのように考えているかは。松原さんはどうですか?」

「うーん……あんまり風野くんにそういう雰囲気は合わないかなあって。」

「確かに……それはそうですね。」

『大切な人、ですか……そうですね、どんな仮定でも良いのですか?』

『はい!!それはご自由に!!』

『はい、では……言葉にして伝えるのはとても恥ずかしいのですが、あなたに会うことを、心のどこかで楽しみにしている自分があります。少し寝坊助なところがある僕を起こしてくれたり、何かときを使ったり、どこかそっけないけど気持ち伝えてくれる……不器用だけど優しいあなたの事をお慕いしています……こんな感じでもいいでしょうか。』

『……素晴らしい!!まさしく、大和男児ってる感じですね!!』

『そ、そうでしょうか……』

風人くん……羨ましいわ。いつか私も、そういう言葉をかけて貰える日が来るといいわね……そして、安心したし少し恥ずかしい気持ちになったわ……

「千聖ちゃん、今度はどうしたの!? 顔が赤いよ!」

「花音、大丈夫よ、少し照れるというか……」

「白鷺さんでも風野くんの言葉には、弱いですね。」

「紗夜ちゃんも少し頬が緩んでいるわよ。」

「はい、私も普段の風野くんを見ていますから、意外というか弱々しいけどやっぱり男の子らしい所はあるんだなって、安心しました。」

「同士ね。」

私と紗夜ちゃんは固い握手をした。終始花音に迷惑をかけてとても申し訳なかったけれど、今度お茶でもした時に風人くんのこと話そうかしら……

夕方

「風人くんの放送、面白かったわよ♪」

「あれが全校生徒に聞こえてたんだよね……恥ずかしい。」

「ばつちり答えられていたから大丈夫よ。」

「親しい人は明言を避けたんだけどね……」

「……今は私と風人くんしかいないから、その答え、教えてくれないんじやないかしら？ふふっ、口外はしないから。」

「……白鷺さんだよ、1番親しい人は。」

「えっ……」

「中学からの付き合いだし、数年前の約束を今でも守ってくれて、おまけに僕を支えてくれて……ありがたいよ。」

「え、えつつつつつつ……」

「し、白鷺さん!?ちよつと、大丈夫!?!」

「きゅ、急には……卑怯よ……バカ」

白鷺さんのご友人

僕自身、家元もあるのかあまり同学年の人と接するのも少なく、友人と呼べる人がほとんどいない。…… 普段から話す人は基本的に日本文化に携わっている方や外国人なのである。実際にうちが広いのもたまに集団で日本観光に来られる人を泊める為でもある。…… といってもそんな機会1度も来てないです。来て3人。…… というか白鷺さんが1番来ている。

そしてなんでこんな話をしているかというと……

「へえ…… 千聖さんのお友達なんですね！」

茶色い髪をした…… なんとというか子犬のようなオーラを出している人が目の前にいるからです。

「はい…… お初にお目にかかります、風野風人です。」

白鷺さんや氷川さんはある程度接しているからいいのだが、初対面の人の前で気は抜けない。

「あ、初めまして！私、羽沢つぐみといいます！」

「ふふっ、じゃあ風人くんの交友も広がったところで注文しようかしら。」

僕は一覧を見せてもらった……なんでだ、カタカナばかりだ。何が何かさっぱり分からない……

「白鷺さん、僕はどうかやらここのメニューが何一つ分からないみたいだ。」

「そうだったわね……。つぐみちゃん、とりあえずコーヒー2つとチョコレートケーキとショートケーキを頼めるかしら？」

「はい！かしこまりました！」テテテテ……

「ごめんね……。ホントに横文字とか色々苦手……」

「逆に珍しいわよ。今どきチョコレートとかを知らない10代って……。まあそこも頼りなくて可愛いんだけど……」

「それにしてもなんとというか、落ち着ける雰囲気だね。」

「ふふっ、気に入って貰えたかしら？さつき注文を聞きに来てくれたつぐみちゃんって子もとても真面目で働き者なのよ。」

「へえ、僕らと同一年にしか見えないけどしっかりしてるんだね……」

「家元継ぐ予定の風人くんが言うのも何かおかしく感じるわね。」

休日の昼間過ぎとはいえかなり静かだなあ……。よく白鷺さんが「混んでるわね……」

とか言ってるけど意外と空いてる。……飲食店ってこんな感じなのかな。

「それに風人くんに来てもらったのはちよつとひと仕事お願いしようと思つたのよ。」

「ひと仕事？ 僕に出来ることならいいけど……」

「ふふつ、頼りになるわね。今度お祭りがあるでしょ？」

「ああ、商店街主催でやるという話は聞いたけど。」

「そこで今年はずぐみちゃんも和太鼓をしないか？ つて誘われてね。」

「も、つていうことは他にも誰かやるつていうこと？」

「というかそういうのは僕よりも経験している親御さんをお願いする方がいいような気もする。どんな事もそうだけど経験値がやつぱりものを言う時はあるし、実際僕は祭りにはあまり行つたことはないから分からない。」

「ええ、巴ちゃんが毎年和太鼓をやつているの。ずぐみちゃんはサプライズで和太鼓をやつて巴ちゃんを驚かせたいらしいの。」

なるほど、それなら僕に頼みに来るのも納得がいく。親御さんに教わつたら言伝でバレル可能性もあるし……ということは

「そのことはさつきの子の親御さんも知らないの？」

「ええ、そうよ。(まあずぐみちゃんは真面目だから、隙間時間にそれっぽい素振りを見せちゃつて気づかれるでしょうね……)」

でもお祭りの和太鼓ってどんな感じなのだろう……本格的な演奏なら僕もきつちりと教えないといけないし。

「お、お待たせしました！チョコケーキとショートケーキとコーヒーです！」

「ありがとう、つぐみちゃん。そういえばつぐみちゃん、和太鼓を教わる相手はみつかったかしら？」

「しーっ……お父さんに聞こえちゃいます。」

「あら、ごめんなさいね。」

「実はまだ見つかってなくて……身近で和太鼓ができる人が巴ちゃんと巴ちゃんのお父さんくらいしかいなくて……」

「ええ……そう思っって強い助っ人を連れてきたのよ。」

「助っ人って……風野さん!？」

「一通り和太鼓も嗜んでいるので……どこまで教えられるかは分かりませんが、短期間であるなら基本は一通り教えられると思いますよ。」

「はあ……！是非お願いします！」

要件変わってない？

風野家

羽沢さんに和太鼓を教えるために家へ招待した。どうやらご友人にもバレたくないらしくここが一番安心して練習できる場所、らしい。当然白鷺さんもいる。僕はあるまい知らない異性と会話するのは得意ではないのでいてもらった方が僕はありがたい。

「へえ…… 蘭ちゃんみたいな家なんですね！」

「蘭ちゃん……？」

「この前華道で交流したでしょ？ あそこの美竹さんの家の娘さんが蘭ちゃんって名前なの。」

「ああ、あの一部が赤い髪色をしていた……」

「ところで、こここの扉だけ少し大きいですけど、大広間なんですか？」

「そこですか？そこは稽古場となっています。普段は腕が鈍らないように続けていますか……」

「風野さんって剣術とかできたりするんですか!？」

「えっ……」

何故か急に興味津々といった様子が現れ、少し驚いています…… 今日ここに来たのは和太鼓をやる為、ですよね？

「剣術とは少し違いますが…… 殺陣、であればできます。」

「少し、お家を見学していいのですか!？」

「ど、どうぞ……。」

羽沢さんの勢いに押され、許可を出す。それほど興味があるのだろうか……

「ふふつ、つぐみちゃんも元気ね。」

「はい…… このように家自体に興味を持ってくださる方はほとんどいらっしやらないので、少し驚いています。」

「この辺りじゃ、蘭ちゃんと風人くんの家くらいだからね。こういう和風建築の家は。」

――
1時間後

「それでは、宜しくお願います。」

「よ、宜しくお願います!。」

家の見学が終わった後、僕と羽沢さんは服を着替えて、用意した和太鼓の前に立つ。白鷺さんは横で座りながら見学をしている。少し楽しそうだ。

「ではまず基本からいきまます。」

その後、僕は羽沢さんに持ち方や距離、基本的な叩き方などを教えていく。羽沢さんも飲み込みが速く真剣に打ち込む。

「……白鷺さんもやりますか？ずっと見ているのも暇でしょう。」

「遠慮しておくわ風人くん。真剣な練習の邪魔にはなりたくないの。」

白鷺さんは遠慮し、僕は再び羽沢さんの方を向く。……桴が重いのか、少し疲れた様子をしている。

「少し休憩しますか？ずっとやってばっかでは疲れますし。」

「い、いえ！まだ大丈夫です！せっかくの機会なので、もう少し練習させてください！」

……もしかして、今日しかできないと考えているのだろうか。別にそんな事はな

いのだが……

「焦る必要はありませんよ。何も今日だけというわけではありませんから。」

「……え？そんなんですか？」

羽沢さんが少し驚いた顔でこちらを見ている。やはり今日限りだと考えていたのか……

「また事前に声をかけて下されば、部屋は確保します。それにこういったことは日進月歩……日々の積み重ねが大事なのです。もちろん羽沢さんのような真面目な方であ

れば練習はするでしょうが…… 本物で練習することに越したことはありません。」

「何から何まで親身にありがとうございます。」

「ただ僕も花咲川で書道を教えている身ですので…… ですので、これを渡しておきます。」

そう言つて僕は2人を部屋に待たせ、物を取りに行く。

3分後

「こちらを使つてください。…… ただ、来られる際は事前にお伝えください。」

「これ…… 鍵、ですか?」

「はい、合鍵です。」

「合鍵!?!」

ゾツ…… 僕がそう言つた刹那、横から殺気が飛び出した。そしてその殺気を放つた…… 白鷺さんが僕の手を掴んでいた。

「風人くん、何をしているのかしら?」

僕を見る白鷺さんの目は…… 驚くほど冷たかつた。…… でも白鷺さんも、僕の家を持っているじゃないか……

「そ、そうですよ！さすがに合鍵は受け取れません…… 防犯上よろしくありませんし。」

羽沢さんがアワアワしながら身振り手振りで説明をする。

「羽沢さんはその合鍵を悪用するのですか？」

「し、しませんけど！受け取れない物は受け取れません!!」

「そうですか…… ですが困りましたね…… それでは僕が家にいる時にしか……」

「そこで、私を頼ればいいのよ風人くん。」

そして先程の殺意が消え、得意げな顔で白鷺さんが鍵を回していた。先程の殺意はな
んだったんだらう。

「それでは二度手間に……」

「いいの風人くん。それくらいの事ならしてあげるわ。（仕事があるかもだけれど……」

風人くんの家に寄るくらいなら大した時間も取らないし。）」

「いいんですか？千聖さんも、忙しいと思うんですが……」

「別にそれくらい大した事では無いわ。それにずっとという訳でもないですよ？」

その後、白鷺さんと羽沢さんが話し合っつて連絡の方法などを決めていた。白鷺さんは
本当にこういう場面で頼りになる…… 改めてそう思った。

夕方 練習後

「今日はありがとうございました!!風野さんにも、改めてお礼をさせてください!!」

「いいのよつぐみちゃん。風人くんは優しいから。」

風人くんは和太鼓や桴などの片付けをしている為、私がつぐみちゃんを見送りしている。

「それにしても不安だわ…… 風人くん、人が良すぎるから合鍵を渡す時に躊躇が無いもの。」

「あはは、そうですよね…… でも千聖さんは合鍵持つてますよね?」

「ええ、私の場合は風人くんを起こさなきゃいけないし…… 何よりこれ、親公認の合鍵なの。」

少しアピールをしておく。もちろんつぐみちゃんがそういう子じゃないというのは知っているのだけれど……

「凄いですね!…… でも、大丈夫なんですか?千聖さん、女優の仕事とかで行けないって事が……」

つぐみちゃんに痛いところを突かれる。今日も途中ヒヤヒヤしたけれど、風人くんは私が女優である事を知らない……

「つぐみちゃん…… 私が女優してる事、風人くんには内緒にしてもらえるかしら?理由は聞かないで。」

これだけは、私の切なる願いだった。風人くんの事を信頼していない訳じゃない……むしろ、愛している。けれども、もし風人くんが私の立場を知ったら……優しい風人くんはきつと態度を変える。私にはそれが耐えられない。子供の頃から知る癒しの場所を……私は失いたくない。

「……分かりました。」

「ありがとう、つぐみちゃん。」

その後、途中まで見送りをしてつぐみちゃんと別れた。

風野家 居間

「それで白鷺さん……何故に僕は正座をさせられているのでしょうか？」

「反省するべき事があるからよ。」

私は風人くんを座らせ、お話をしている。もちろん案件は合鍵。

「風人くん……どうして合鍵をそうやってホイホイ渡すのかしら？」

「別にそんなに貸してはいませんよ……」

別に風人くんの優しさと良心を怒っているわけではない。けれども……合鍵を持つというのは私の特権だもの。親公認の、特別なもの。わがままでけれど、そんな特別な物を簡単に他人に渡そうとする風人くんを、私は怒りたかった。

「それに防犯上危ないの。もちろん風人くんの家は広いから、侵入しようと思ったらどこからでも入れそうなのだけれど……せめて最低限の注意はして。いい？」

「はい。」

素直に風人くんが頷く。子供みたい……そんなところも可愛い。

「それと後……こういう事は今後、しちやダメよ。風人くんは少し乙女心を勉強して、察して欲しいわ。」

自分でもわがままで分かっていて。けれど言わずにはいられなかった。この場所は、私の家族と、私だけが知っている……私がただの私でいられる場所。

「乙女心、ですか。」

風人くんは難しそうな顔をして考え始める。そこまで深く考える必要も無いのだけれど……

「……分かりました。勉強してみます。」

「ありがとう。それとごめんなさい……随分とわがママを言ってしまったわ。」

その後は風人くんと一緒に料理をして、寝るところを見てから自宅に帰った……この時間は、あとどれほどあるのかしら。

乙女心、勉強

早朝 花咲川 弓道室

「……………フツ！」

紗夜さんが弓を引き絞り、矢を的の中心近くに撃ち抜く。その集中力と腕に、後輩さん達が息を飲む。

「お見事です。氷川さん。」

「ありがとうございます。風野く……………先生。」

氷川さんは僕と2人である時や、白鷺さんという時は風野くんと呼ぶが、弓道室に入ると先生に変わる。その徹底ぶりは見事である。

「先生もお手本を見せてください。」

後輩さんの1人がそう言うってくる……………氷川さんの方が佇まいが整っているからそっちの方を参考にしてもらいたいんだが……………

「……………分かりました。氷川さん、そのまま練習を続けてください。僕は後輩さん達に指導しますのです。」

「分かりました。」

そう言うと氷川さんはすぐに顔を的の方に戻し、再び姿勢を整え直す。

40分後

指導を終え、僕と氷川さん2人が残り、後片付けをしている。

「風野くんも、皆さんから憧れの視線を向けられていましたね。普段からああいった清廉な佇まいをこのころがけてください。」

「日常からこういういった雰囲気を出すと誰も寄ってこなくなるので……」
「そうですか？私はそのういった方に好印象を受けますが。」

氷川さんのその言葉を聞き、以前白鷺さんに言われた「乙女心」が頭に浮かんだ。こ
ういったこと察する為にも乙女心への理解は必要なのだろうか。

「氷川さん…… ひとつ聞きたいことが。」
「なんですか？」

意を決して聞くことにする…… 氷川さんがとても真面目な顔でこちらを見つめる
ので、言い難い……

「氷川さん…… 乙女心とは、何ですか？」

氷川さんの真面目な顔が、一瞬で怪訝な顔に変わる。やはり真面目な話題だと思われ

たのだろうか……

「…… 熱は、無さそうですね。」

そして無言で顔を近づけ、額を合わせる。澄んだ瞳が、すぐ目の前にある。

「熱……？」

「…… いえ、風野くんからそのような言葉が出てくるとは信じられなくて…… 体

調不良か何かかと思いました。白鷺さんから何か言われたんですか？」

「よく分かったね……」

「あなたの言動が分からないほど付き合いは薄くありませんから…… いえ、この場合は風野くんの言動が分かりやすいというのもありますが。」

「…… そうなんだよ。僕は、乙女心と言うのを全然分かっていないように…… 今後、他の方との付き合いの際に気を利かせる事が出来ればいいのですが。」

「…… なるほど。そういった目的でしたか。白鷺さんが言っている乙女心はきつとそういう事では無いと思いますよ。」

氷川さんが優しい顔で論してくる…… この人はきつとお姉さんなんだろうな、と思つた。

「風野くん、放課後、時間はありますか。」

「今日は大丈夫だと思う…… けど、何かあるの？」

「少し乙女心について、私ができる範囲で話そうかなと……出来れば白鷺さんには内緒にしておいて下さい。」

「え？どうして……？」

白鷺さんにバレたら不味いことでもあるのかな……？氷川さんはそういう危ないことをする人ではないから何をするのか思いつかなかった。

「乙女心を学び、風野くんが白鷺さんを驚かせる為です。サプライズ……という訳ではありませんが、少し成長した自分を白鷺さんに見せてあげたら良いと考えました。」

「そういう事でしたか……ありがとうございます、氷川さん。」

道具を片付けた後、氷川さんと集合時間、集合場所を決め、弓道室を去る……最近
は同年代の誰かと過ごすことも多くなったな……白鷺さんのおかげかな。

放課後 氷川家

「お、お邪魔します……」

「どうぞ、私の部屋で待っていてください。」

氷川さんに連れられ、氷川さんの家に来る。こうやってプライベートで知り合いの家に来るのは白鷺さん以外無かったな……

紗夜の部屋

「では……微力ではありますが、乙女心について教えさせてもらいます。」

「は、はい……。」

僕の目の前には……可愛らしい犬のイラストが入った紙芝居が置かれている。氷川さんも少し得意げな顔をしているのを見るに、きつと自信作なのだろう。

「では早速質問になってしまいますが……風野くんは女性と接する時、何を心がけていますか？」

「心がけている事ですか……これは女性には限りませんが、まずは他人として尊重することを心がけています。」

「確かに武道を嗜んでいる方からすれば礼儀は大事なんでしょう……ですが、それは異性間の関係においてはあまりよろしくありません。風野くん、他人として捉えるのはあまり良くないんです。」

「えっと、なんで……？」

「相手を複雑に捉えてしまうからです。他人であると認識することは、その人は自分とは思考回路が全く違うという前提に立っていることを意味します。」

「でも、自分の価値観で考えたら、捉え間違えないかな……？」

「その心配の根源こそがさつき話したことです。別に私はその子に起こったことを風野

くんが独自に解釈して理解しろとは言っていない。その子の気持ちに寄り添い、まずは理解するよう心がけてください。その上で反応してください。」

紙芝居をめくり、犬同士が会話している絵が描いてあり、上にいい例悪い例と併記されている。これ作るのにどれくらいかかったんだろう……

「勉強になります……」

「素直なのはいいことです。風野くんのそういうところは変わらないですね。」

「素直、なのかな…… たただだ僕が無知なだけじゃないかな？」

「確かに無知といえればそれに該当するかもしれませんが…… 知らないとしつかり自覚していることは大切です。それに風野くんは学んだことをしつかりと実践しようとする人ですから素直ですよ。」

そうやって氷川さんは僕の頭に手を置き、撫でる。

「風野くんは、自分がどういう人間で、どういう行動を取るかは知っています。後は相手との交流を増やし、相互尊重の元で、お互いの心に触れる機会を増やしてください。そうすればきつと理解できますよ。」

「なんか慰められた……」

「私自身…… 同じ女性の方との交流の中で山ほど失敗しています。一番身近な妹とすらすれ違う程ですから…… 私も中々わがままなんですよ？」

「そうは見えないけどな……確かに固い一面はあるけど、わがままとは言えないんじゃないかな……」

僕は弓道とこういった少しの時間しか氷川さんと交流していないけど、わがままな人とは違うことは分かる。自分の中にある矜恃を貫き通す……それを自分に課している。そんな雰囲気があつた。

「ふふつ、私と似たようなことを言っていますね。」

「似たもの同士かもね、僕達。」

「はい……そろそろお時間ですし、今日はここでお開きにしましょう。」

そのまま氷川さんに玄関まで送ってもらい、家を出る。本当に丁寧な人だな……そう思った。

「風野くん……ああ言うことはあんまり言わない方がいいですよ。下手に口説いてる風に聞こえますし。」

風野家

「ただいま帰りまし……白鷺さんはいないのかな?」

家を一回りしてみたが、白鷺さんの姿はどこにもなかった。その代わりに、書き残しが

居間に残っていた。しかもかなり焦ったような字体だ。

『覚悟しておきなさい』

「……………何を覚悟するの……………？」

補習回避に全力を（政治家風）

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「あの…… 白鷺さん、その覇気は一体何でしょうか？」

「……………」

白鷺さんが、腕を組んで、仁王立ちをしたままこちらを見つめる。その目には怒りというより、何かを威圧しようとする目だった。

「もしかして昨日、家にいなかったこと？それは氷川さんの家に用事があったんだよ。」

「へえ…… それは初めて聞くわね。」

「どうやら違ったみたいだ。そしてさつきより、より威圧的になった。さつきのを100とするなら、今は145くらいになった。」

「まあ、それはいいのよ…… 風人くん、さつき学校の先生から連絡があったの。」

「へえ…… それで？」

「風人くん…… 今度、宿泊研修があるのは知っていますでしょうか？あれ、第一中間テストで赤点が出た場合、初日に補習を受けて、2日目から参加になるの。」

確かにそんな話は聞いていた。僕は一応生徒をやりつつ書道を教えている立場にい

るので、一応教員事情なるものは聞いている。そしてそのようになっていいる事を口うるさく学年主任から言われた。

「それでね風人くん……あなた、入学試験の英語……0点らしいわね。成績開示の結果を私が教えて貰ったわ。」

「……………」

「……、目を背けないで。」

気まづく白鷺さんから目を反らすと、白鷺さんに両手で顔を掴まれ、こちらに顔を戻される。改めて見ると綺麗な目をしてるな白鷺さん……

「…………… そんなにまじまじと見つめないで風人くん。恥ずかしいわ。」

「顔をこつちに向けてるの白鷺さんじゃん…… そんな頬を赤らめる事でもないし。」

「いいの!!それはそれとして…… いい!?風人くんのスペックだと補習1日でどうにかなるものじゃないの。そ・れ・に!!!風人くんだけ補習になるわけにはいかないの!!」

「どうして?」

（風人くんと初日から楽しみみたいってそれくらい分かって…… と言いたいけど、鈍感さんには通じないわよね。）

「…… と、とにかく!仮にも他人に指導する立場にいる風人くんが、そんな状態にいるのじゃ面子が立たないでしょ?」

「白鷺さんは僕のお母さんなの……？」

「お母さんじゃないわよ。私は風人くんの妻になるのよ。」

「……………え？」

妻になる……？白鷺さん、僕と結婚するのもう確定してるの？すごい……もうそんな将来設計してるんだ。

「……………!!!ま、待つて待つて！今のは違うの！違わないけど！」

「どつちなの？」

「今はどつちでもいいの！とりあえず補習回避の為の勉強を今からするわよ……想像してみなさい、赤点を取った時の紗夜ちゃんの反応を……」

「氷川さんの……？」

言われてみて氷川さんに赤点を見せた時の反応を想像する……おそらく小言を延々と言われるだろう。そして昨日家に行ったことで氷川さんはとても面倒見がいいことも分かった……次のテストまではほぼ毎日家に呼ばれて勉強することになるのかな……？でも何はともあれ……

「僕の自由は、確実に消え去るね……」

「その上で、確実に今の生活と両立が前提になってるわよ。それに赤点回避じゃなくて、目指すは平均点以上よ。」

そして、僕と白鷺さんによる、英語の勉強が始まった。

2 時間後

「嘘でしょ……？」

「嘘じゃなくて、これが現実だよ……」

白鷺さんが持ってきた教科書で順を追って授業の復習をしていた。……正直何が書いているか全く分からなかった。古典や漢文であれば普通に読めるのだが……

「……あのね風人くん、高校生の教科書でアルファベットからやり直しはとんでもないわよ……」

「至極申し訳ないと思っております……しかし本当に苦手なのです。」

「中学校時代、風人くん英語の授業受けてなかったのかしら？」

「受けては……いきました。しかし中学時代はそれこそ鍛錬に力を込めておりまして……」

「それは私も知っているわ。朝早くから必死に鍛錬に励んでいたことは私が一番見ているもの。けれど、それで何かを疎かにしていいという訳でもないわ。それは火凧さんからも言われているでしょう？」

「まったくその通りです……」

「そうね、精進して。それはそれとして……少し休憩する？」
「うん、ちよつと甘味を持つてくるね。」

白鷺さんにそう言い残し、いろいろを取りに行く。いろいろを皿に分け、戻つてくると白鷺さんが僕の服を着て、それを顔に近づけていた。

「ふふつ、風人くんの匂い、やっぱり落ち着くわ。……好き。」

恍惚とした顔だった。僕が入ってきているのも気づいていないくらいにお気に召したらしい。……その恍惚とした顔は、すぐく幸せそうで大人な顔をしていた。少し気配を消して、このまま休憩してもらおう。

「ふーっ……ふーっ……背徳感は少しあるけれどこれは、私の特権よね。」

背徳感はあるんだ……確かにうちが洗濯で使っている物は他の人の家庭とは違うことは知ってはいるけど……そんなに匂いが違うものなのかな。

「宿泊研修、自由時間とかあるらしいけど、風人くんと一緒に過ごせるかしら……？ 先生のような立ち位置かもしれないし、女の子だらけの集団に馴染めるか心配よね……」
「……もしかして、気づいてる？」

「気づいてるわよ。私相手に気配を消そうなんて甘いわよ風人くん……というか、私は別に独り言をこんな大きな声でやる人でもないのよ。」

「それは大変失礼しました……」

その後、一緒にいろいろなを食べながらフィードバックを行い、白鷺さんは家に帰った。これから中間テストまで毎日これをやるらしい。僕の頭は果たして持つかな？

翌日 花咲川

「……それで、風野くんとは上手くいってるの？」

「……これはいつてるとは到底言えないわよ花音。鈍感すぎるのよ!!!ここまで言ってるんでまだ私が好意を抱いているとか考えてくれないのかしら……？」

私は昨日あったことを花音に全て話す。確かにはつきり言えない私にも問題があるけれど…… やっぱり告白とかは風人くんの方からして欲しい。そんな淡い願いもある。

「あはは…… 千聖ちゃんも大変だね…… でも分かるな。風野くん、集中した時の真面目な顔はすごくかっこいいよね…… 告白、されたいよね。」

「花音？」

「ふええ…… 千聖ちゃん、怖いよ…… 風野くんを狙ってる訳じゃないよ。」

「そう…… ならいいわ。花音とは争いたくないもの……」

（でもさっきの目、明らかに敵を見る目だったよね……？）

全力投球

早朝 花咲川 弓道場

「I don't... I don't...」

僕はひたすらに唱え続ける。それが中学生レベルであつても、周りから引かれようとも覚えなければならぬ。

シュツ... ドン

「... 風野く... 先生、もう少し静かに射てもらえませんか？」

「氷川さん、ゴメン... これはやらなきゃいけないんだ。」

「どうして雑念だらけなのに、矢はしっかりと中心を射ているんですか... 悩みがあるなら、付き合いますよ？」

氷川さんが心配そうに寄ってくる。しかし今ではない... 今はまだ氷川さんに頼るときではない。

「英語が出来ないんだけど... でも、自分でなんとかするよ。これは氷川さんに頼る以前の問題だし。」

「そうですか、勉強に励むことはいい事ですよ... しかし、とりあえず稽古の中でプ

ツブツいうのは辞めてもらえませんか？」

「えっ、ちよっ?!?!」

振り向くと氷川さんがこつちに弓を構え、射ようとしていた。咄嗟に飛んできた矢を掴み、なんとか助かる。……………玩具の矢だった。

「氷川さん?!?!ビビるからホントやめて!!」

「ごめんなさい、手が滑りました。」

「手が滑りました、じゃないよ!!!というか真顔で言わないで怖いから!!!あと人に向けないー!」

「しかし先生、先生の一举一動にはここに居る皆が気にします。それをご自覚なさった上で、ここにいてください。」

「はい、すみませんでした……………」

「はあ……………手のかかる方です。」

そう言いながら氷川さんは微笑んでいた。入学した時よりもすごく表情が柔らかくなつたかと改めて思う。

後輩（氷川先輩って、先生と絡むと可愛いよね。）

後輩（分かる！普段の凜とした感じとは違うよね。）

—————

昼休み

「……ということがありました。私が言うのもなんですが、生真面目で融通が利かないんですね。」

「風人くんも真面目ね……。今のとって惚気かしら？」

「惚気……。いえ、私はそのような。」

「前々から気になっていたけれど、紗夜ちゃんって風人くんの事どう思ってるの？」

私は気になったことを言う。風人くんが1番関わっている女性が私なら、紗夜ちゃんはおそらく2番目にあたる。それに紗夜ちゃん自体も風人くんに対してはいい印象を抱いている……。どうなのかしら。

「好きですよ。」

「!!？」

躊躇う様子もなく、紗夜ちゃんはキツパリ言う。嘘、こんなに近くに恋敵がいたなんて……。

「へ、へえ……。そうなのね。す、好きなのね……。」

「千聖ちゃん……。お箸揺れてる……。」

花音に指摘され見てみると、本当に震えていた。これは武者震い……。それとも恐怖……。紗夜ちゃん、恐ろしい子。

「……………!!ま、待つてください! 語弊です! 好きというのは本当なんです、ただ……………それは白鷺さんが向けている感情とは違うと思います。どちらかというと親愛というか……………弟がいたらこんな感じなのかなと、家族みたいな感じですよ。」

「家族……………なるほど、そういうった感じなのね。」

少し安心した。紗夜ちゃんが恋敵になったらとても手強いと思った……………だって私より接点多いし。それに風人くんの隣に立つても、ほとんど違和感を感じない。ある意味それが怖い。

「ただ……………風野くんが男女としてのお付き合いをしたいと言われたら……………やぶさかではない、とは思いますが。」

ギョルン

「ふええ……………千聖ちゃん、すごく怖いよお……………」

紗夜ちゃん、それを人は好きというのよ。無自覚なのかしら。

「……………ふふつ、冗談ですよ。私は恋には疎いのでよく分かりません。ただ、揺るぎない人間性があればと思っただけです。」

冗談には見えなかったわよあの時の表情……………紗夜ちゃん、いつの間に頬を赤らめるなんて技を手に入れたのかしら。

「心臓に悪い冗談ね……………ふう。」

「からかうような真似をしてすみません。白鷺さんにこれほど想われている風野くんは幸せ者ですね。」

…… すぐく見透かされた気分はするけれど、何はともあれ紗夜ちゃんが恋敵にならないことが確定して、内心ホッとした。

「女優の事は、話したのですか？」

「まだよ。…… 言えないわ。」

「誰よりも信頼しているのに、ですか？」

「信頼しているからこそよ。今の関係が全て欺瞞であつて欲しくないの……」

ちよつとやそつとの事で態度を変えるほど風人くんは心の狭い人じゃない。けれど、優しい風人くんだからこそ、私が女優と知ればどうなるのか分からなかった……

「…… 実るといいですね、その恋が。応援してますよ。」

「私も、応援してるよ千聖ちゃん……」

「ありがとう。」

「話を戻しましょう。英語の件ですが、風野くんは自力でなんとかしようとしてましたし、私は風野くんから頼まれられない限りは干渉しないようにはします。ですがお手伝いが必要であれば、いつでも呼んでください。」

紗夜ちゃんが話題を戻してくれた。あまり触れられたくない話題だつて分かったの

かしら。

「私も…… 教えてもいいかなって思うな。千聖ちゃんに協力するよ!」

紗夜ちゃんは基本的には不干渉、花音は手伝ってくれると申し出てくれた。これなら風人くんも集中できる環境が出来そうね。

「2人ともありがとう。頼りになるわ。」

「気にしないでください。風野くんの赤点は何も今に始まった話ではありませんし…… 私もそろそろどうにかしないと考えてました。後輩が入ってきた以上、面子にも関わってくるでしょう。」

「確かに……」

書道の授業では、達筆で、歴史にも詳しい知性溢れる雰囲気が出ているけれど、それと武道以外はてんでダメ…… ギヤツプ萌えしてしまうかも。

「それはそれで…… アリね。ギヤツプが可愛いわ。」

「ふええ…… でも、赤点だったら宿泊研修に参加できないんだよね……?」

花音の一言で一気に現実に引き戻される。

「…… そうね。腑抜けていたらダメよね。2人ともありがとう。今からテスト範囲の総まとめと風人くんの為のオリジナルテキストの作成に入るわ。」

私は2人に礼を言い、教室に戻る。色々不安要素を吐いたからか、気持ちがすごく軽

かった。友達がいるってやっぱ凄いいことなのね……

「あはは……行っちゃったね。」

「あそこまで直球な白鷺さんを見るのは風野くんが関わっている時だけです。楽しんで何よりです。」

「うん……けど、もどかしいよね。なんか、2人とも引き気味というか、控えめだから……進展しない。」

「そうですね。当人達の問題ですから、関わるべきでは無いでしょうが……さすがに両想いなのにここまで進展が無いといじらしいですね。松原さん。私たちが後押ししましょう。プランを組み立てましょう。」

「ふええ……紗夜ちゃんが恋愛コンサルタントになっちゃった……」

恋愛コンサルタント

「ではこれより、花咲川恋愛コンサルタントの会議を始めます。」

「あ、あはは……」

「あの、これはどういう……」

「恋愛指導！です。」

放課後、氷川さん呼び出され、教室に連れていかれ、鍵を閉められる。この空間に、氷川さんと松原さん、そして若宮さんと僕がいる。何がどうなってるんだ……

「あの、氷川さん。これはどういう……」

「良くぞ聞いてくれました風野くん。」

チャキつと、メガネを右手で上げ、こちらを得意げな顔で見つめてくる。ここまで生き生きしている氷川さんというのも貴重なものだ。

「以前、風野くんには乙女心に関して、少し話しました。今日はそういったことを含めて、実践へ移す練習をしたいと思います。」

「れ、練習……」

「はい、当然本番の相手は白鷺さんです。しかし、風野くんはいきなりそういった俗世に

あることを、いきなり実践できるなどと微塵も思っていない。」

「さ、紗夜ちゃん、ちよつとストレートなんじゃ……」

「これくらいダイレクトに伝えないと、風野くんは鈍いので気づかないんです。」

「師匠!!そこまで鈍感だったんですか!?!」

悪意のない、直球な言葉が僕の心に突き刺さる。ストレートやダイレクトが何かは分からなけれど、鈍感って……

「待って……僕は、そんなに鈍感じゃない……だって、私は協会の方などをおもてなした経験もあるし……」

「その心遣いと、こういった心遣いは別物です。見苦しい言い訳は辞めてください。」

僕の釈明は虚しくも、氷川さんに一刀両断される。この氷川さんの顔、勝負を決めにかかる時に人がする顔と同じだ……そして心がぼろぼろ。

「うっ……僕の心が……穴だらけ……」

「ふええ……ちよつと、言い過ぎじゃないかな……?」

「すみません、傷つける意図はありませんでした……では、仕切り治しましょう。」

風野くん、今からいくつか質問をします。」

「う、うん。」

眼鏡の位置を直し、氷川さんはこちらに向き直り、澄んだ目でこちらを見つめる。白

鷺さんもそうだけど、女の子の瞳は綺麗だな……

「……そ、そんなに見つめられると、困ります……」

「あ、ご、ごめん……」

（こっちの方が、初々しいカップルみたいだけど……）

（師匠は純粋ですから!!!）

「んんっ……では、まず、風野くん。あなたは白鷺さんとどこかへ行く際、どのような場所に行きますか？」

「えっと……演武の指導、文化講演会のおもてなし、地域での催し、協会の方との出稽古……」

「はぁ……」

僕の回答に、氷川さんは頭に手を当て、ため息を吐く。え、何か間違えたのだろうか……？

「風野家の用事以外で、どこかに行くことはありますか？」

「……」

頭の中で、記憶を探る……… どういう訳か、僕の頭の中に、家の所用以外で白鷺さんと外に出た記憶がない。

「もしかして……無いの？」

「無いわけ無い、とは思いますが……」 所用の方が圧倒的に多く。」

「あはは…… 学校帰り、とかは無いの？」

「…… ありました。」

「では、それを聞かせてください。」

僕が思い出したことで、3人が目を合わせて、少し微笑む…… とつておきを伝えなければ。

「風野家には、兵藤家という分家がありましたね。ここでの夏祭りでは、商店街の方々、僕を含めた風野家、そして兵藤家で全面的に開催の手助けをするんですよ。最近では、弦巻家も、参加するかどうかという話があります。」

（これってもしかして……）

（夏祭りを共にした、では無いでしょうか。驚きました。風野くんからまともな話が出てきました……）

（それ、ちよつと失礼じゃないかなあ……）

（お祭り！是非次は私もお手伝いを!!）

「そして、祭りの手伝いをする傍ら、白鷺さんの浴衣の着付けを手伝いました。普段の白鷺さんとはまた違った、奥ゆかしい雰囲気が出ていました。」

（惚気、飛んできたね……）

(これは、成果ありと見ていいでしょう。)

(羨ましいです!! 私も着付けしてもらいたいです!!)

「それで、その後はどうしたんですか?」

「僕自身は、和太鼓を叩く仕事がありましたし、終了後も後片付けに従事していました。待たせるのも申し訳なかつたので、分家の香奈を、白鷺さんに同判してもらおうよう要請し、そのまま帰ってもらいました。」

『はあ……………』

「え? ため息?」

とつておきのエピソードを話すと、3人がほぼ同時にため息を吐く。え、なん
で……………

「その後、白鷺さんはどのような感じでした?」

「頬を膨らませていましたね。香奈とはとても楽しそうにお祭りを回っていましたし、帰る際もとても楽しそうに話していたので、楽しんで頂いたものだと思っていました
が…………… 帰ると、頬をふくらませて怒られました。『へタレなのね!!!』と。」

「それは…………… うん、そうなるよね……………」

「ええ……………」

僕は安全に配慮したし、楽しめるように、それに女の子同士語りたいたいこともあるだろ

うし、だから香奈に任せたのに……なぜ怒られるんだろう。

「師匠！それはダメです！」

「分家の方は下の名前で呼んで、白鷺さんは上の名前で呼ぶんですね。」

「身内のようなものですから。」

宗家・分家とはいうものの、交流自体は幼い頃からあった。母が分家を訪れた時に、決まって話をしていたのは香奈だった。箱入り娘というだけあって、とても大切にされていたし、礼節も重んじていた。そういう面もあったからか、僕とは直ぐに打ち解けたし、仲良くなった。

「僕自身、こういった外部との付き合いがどうしても少ないものでして、自然と身内や分家の者との時間が増えるんです。」

「なるほど……風野くんの事情はだいたい分かりました……これは少々、事前練習が必要ですな。」

「えっ」

氷川さんが眼鏡をかけ直し、髪を括り始める。そして括り終えて、何かを紙に書き始める。

「風野くん。あなたがこのままいけば、距離は永遠に縮まりません。」

「今のままじゃダメなの……？」

「ダメです。もどかしいです。」

「も、もどかしい……?」

「風野くん、前に進んでください。今の関係が続けるというのは、お互いにとつてあまり良い話ではありません。その関係は欺瞞でしかありません。」

「でも、白鷺さんがどう考えてるかは分からないし……」

実際、白鷺さんと知り合って時間が経ち、考え方や所作の方向性は大体分かってくる。しかし、白鷺さん自体が何をどう考えているかは全く分からない。

「……御二方がどういった経緯で知り合い、親交を深めているかは私も白鷺さんから聞いています。風野くん、きつかけはどうあれ、白鷺さんばかりがアプローチというのも、バランスが釣り合いですし、何より風野くんが世間を知らなさすぎです。その結果、なあなあな関係が続いているのです。」

「うっ……そこまで直接言わなくても……」

「なるほど!では今はケンタイキ、ですね!!」

「若宮さん、それも違う……というか結婚してないし、付き合っていない。」

この子ら、僕に遠慮なく辛辣な言葉を……松原さんも、横でうなづいているし。

「人間の感情は、水のように形は成さず、流れていく、変化するものです。そのままの関係なんてものは存在しません。人として誰かとして接し、関係を築き、発展させること

は時に衝突や亀裂を生みます。しかし、そういったことも含めて人間関係というので
す。風野くん、まずは白鷺さんのことをもつと知ろう、としてください。」

「……………」

「生真面目なあなたのことです。白鷺さんが何を考えているか分からない、だから踏み
込み方が分からない。風野くんが今いる所は、そこだと思えます。」

氷川さんに、凶星をつかれる。なんで僕以上に僕のこと分かるんだろ……………

「知ろうって言ったって、どうやって……………」

「それにはしつかりと対策は設けています。」

そして書き終えた氷川さんが、その紙をこちらに見せつけてくる。何か色々書いて
ある……………

「これは……………」

「2人の親愛を深めるための催しです。まず、風野くん、洋服をひとつは持つてくださ
い。どこでも和服というのは、どうしても浮いてしまう場面があります。」

「制服は……………」

「学校帰りに遊びに行くというのであればそれでも構いません。しかし、白鷺さんは放
課後忙しいですし、風野くんも家の用事があるでしょう。制服デートなどする時間は無
いと考えています。」

「で、デートって何……?」

「……え、そこからの?」

松原さんがそんな物存在するのかわんばかりの驚きの目線をこちらに寄越す。

「そういえば前に英単語帳で見たような……」

「それはdateで日付です。デートとはまた違います。」

「あ、そうだっけ。」

「はあ……とりあえず、この計画には3段階あります。まず、若宮さんが風野くんをコーデイネートします。」

「はい!任せてください!師匠をカッコよくします!!」

「では、お願いします。そして次の段階ですが、本番の予行演習をします。これに関して、全員で協力してやります。若宮さんは相手役、松原さんと私で、採点役をします。そしてその良かった点、反省点を踏まえた上で、白鷺さんと本番をやってもらいます。」

「もし、不安なら、私も相手役に付き合うよ……?」

「……分かりました。よろしくお願いします。」

最初の方は何を言っているかは分からなかったが、確かにいきなり本番、しかも不慣れなことは僕には無理だ。この練習は、間違いなく今後の僕の糧として絶対に必要になる。

「す、すごい綺麗なお辞儀……」

「では、日程など計画の詳細を詰めた後、またお話します。」

いざ服買いへ

『服を買いに行く時は、制服で行ってください。』

氷川さんにそう言われたのを思い出し、制服へと手を通す。着物では何か不味いことでもあるのかな……？

「…… あら？ 風人くん？ 学校に用事があるの？」

「ううん、今日は洋服を買いに行くやらなんやらで呼ばれてるんだ。」

「へ、へえ…… ちなみに、誰と行くのかしら？」

「若宮さん。若宮さんは服に詳しいらしいから整えてくれるらだつて。僕知らなかったよ……。」

（イヴちゃんと買い物…… 何かしら。この異様な胸騒ぎ…… でも待つて、確か占いで。）

しばらく黙り込んだ後、白鷺さんはカバンの中から何やら書物を取り出し何かを探し始めた。

（運勢占い…… 牡羊座の私は、『意中の子は何かを隠している!!! 慌てず大人な態度で構えよう』ね…… 風人くんが私に都合の悪いことを隠すはずは無いし、これは慌て

ることでは無いわね。大人だもん、私。」

「いいんじゃないかしら。風人くんもそろそろ洋服の私服を買っておいた方がいいと思っていたのよ。」

「やつぱり15歳を超えたら外に行く機会も増えるのかな。」

「……ん、ま、まあ風人くんは元々外に出ることは多かつたけれど……私用というのも経験が必要ね。（それを今まで遮断してきたのは私だけけれど……）」

「白鷺さんはよく知ってるね……」

朝食を取り、氷川さんがくれた地図を頼りに集合場所を目指す。白鷺さんとの本番の為だけにここまで尽力してくれる氷川さんには感謝しかない。周りの人達より俗世間に馴染めてない僕の理解力に合わせた対策を用意してくれている。

「待って風人くん!!忘れ物!!」

「え?忘れ物など……」

『生活録』よ。風人くん、これが無いとまともに買い物も出来ないじゃないの……『生活録』……僕がこの俗世で生きていく為に母が教えてくれた諸事を記録したものである。これまでの僕はこれが無ければ何も出来なかつたが最近はどうでもない。買物、特に安い時は果斷即決。お会計の際は端数がキリよくする為に硬貨を利用する。そういうった学びを得たのだ。

「む。それは少し心外だな白鷺さん。人は慣れるもので、最近はそのが無くても出来るようになったんだよ。」

「そう言つてこの前の買い出しで500円玉と寛永通宝を間違えたのは何処の誰かしら……？」

「うっ…… お金で丸いのは同じ……」

「どう見ても作りが違うでしょ。いい風人くん、これから女の子と私用で出かけるのよ。私はともかく、他の人の前でそんなミスをしたら相手に迷惑がかかるわ。万全を期して、女の子…… イヴちゃんを先導するつもりで臨むべきなのよ。」

「は、はい…… 誠にその通りでございます……」

白鷺さんに喝を入れられる。僕を叱る時の白鷺さんの声や威圧は間違いなく父など比でもない…… 我が家で一番怖い母にも並ぶくらいである。

『生活録』、慎んで受け取ります。…… 行つてまいります。」

「いつてらっしゃい。ちゃんと門限までには帰つてくるのよ。(キリツとした風人くんの顔もいいわね…… ギャップ萌えかしら。)」

そして白鷺さんに見送られ、改めて地図を開き、目的の場所へと目指した…… のはず。

「…… 今、どっか？」

「はああああ…… しまらないわね。」

駅前

無事集合場所へとたどり着き、周りを見回す。休みの日でありながら人の行き来は多く、楽しそうに歩いているつがいも多くいる。

(なんと…… って言っても、普段の朝に比べれば制服のようものを着て死んだ目をしている大人の男性方は少ない。きっと英気を養ったんだらうな……)

数分後

「師匠ー！お待たせしました！」

「若宮さん。おはようございます。」

「はい!!おはようございます!!」

こちらが頭を下げると、若宮さんも丁寧に頭を下げて返してくれる。頭を上げて若宮さんを見ると…… 普段とは違う雰囲気があった。普段の三つ編みを下げていない。

「髪型、変えたの？」

「はい！それとサンングラスも持ってきました!!」

「さ、サンングラス……？それは何故。」

「あっ……………日差しが眩しいんです!! 師匠も使ってみますか?」

「ん?……………なるほど、黒い眼鏡で陽の光を弱めているのか。」

「そ、それはそうと師匠……………ど、どうでしょうか。」

「どう……………? 装いは大変美しいよ。学校での若宮さんしか知らなかったから、新鮮なんだ。」

「……………!!! ありがとうございます!! 師匠に褒めてもらえて嬉しいです!」

若宮さんが頬を赤らめ、キラキラした目で喜んでいる。

「……………」

「どうしました? 師匠?」

「若宮さん……………少し面倒な相談をしてしまうんだけど、言葉遣い、どうしたらいいんだろ?」

「言葉遣い? 普段通りでいいんじゃないんですか?」

「その……………私用で白鷺さん以外と出かけるのはこれが初めてなんだ。学校では一応剣道における師弟関係のようなものがあるから丁寧語を心がけていて、教室にいる時は同じ立場にあるからざつくばらんな話し方……………完全な私用は、どれに該当するのか……………? 『生活録』にも載っていないんだ。」

「『生活録』……………? 師匠!! この古めいた書物がそうなんですか!? これは何処で手に入

れたんですか!？」

「え、家に沢山あるよ……これ、そんなに珍しいのかな。」

若宮さんに『生活録』を渡す。勿論文字も全て草書体で書いているので、書道の教養がある程度持っている人でないと読めない。

「おおー!!これ、師匠が書いたのですか!？」

「うん。そうなんだけど……それは母の言伝を全て記しただけの物で……僕が全部考えて書いた訳では無いんだ。」

「でもスゴいです!!昔の書物と見間違える程です!!やはり師匠はブシドーを極めていますね!!!」

「驕るべからず……僕なんてまだまだひよっこ。果ては無く、道がただただ続いているだけだよ。」

「おおー……!!!」

「僕の話は置いておいて……言葉遣い、どうしたらいいかな。」

「私はそのままでもいいですよ?師匠によそよそしくされても困ります!!」

「分かった……じゃあ、このままにしようかな。」

「はい!では行きましょう!師匠!!」

そして若宮さんに手を引っ張られ、目的地へと向かうことになった。若宮さんが楽し

そうで何よりである。

シヨツピングモール 入口

「ここです!!」

「へえ…… 大きいね。どれだけ畳を敷いているんだろ……」

「師匠! 畳は無いですよ。」

とても大きい建物だった。何階層まであるんだろ……

「これだけの広さであれば、服の数はどれほどの物なんだ……」

「??師匠、ここを知らないんですか?」

「うん。」

「ここはシヨツピングモールって言って、色んなお店が揃っているんです!! ここに来れば、必要な物はおおかた揃います! まさしくゴエツドウシユウ、ですね!!」

「店同士の仲は悪いの? 何か違うような……」

「じゃあ行きましょう!! 師匠を、とびきりカッコよくしてみせます!」

胸をどんと叩き、若宮さんがフンスフンスとやる気に満ちている。稽古の時といい、やる気に満ちている若宮さんを見るのは楽しい。

「あれ、あれって若宮イヴちゃんじゃない!」

「え、ホントだ!」

「あの一緒にいる人、誰だろう?」

「有名人……じゃないよな。あんな周りをキョロキョロしてる奴が若宮さんと何か関係あるわけないし。」

そして周りがざわつき始める。若宮さんはこの辺りで名を馳せているのかな……僕は知らなかったけど、もしかしたらここら一帯を仕切っているのかもしれない。

「あう…… 師匠!! 少し外しましょう!!」

「え? ちよつ……!?!」

若宮さんに引つ張られ、少し人気の少ないところに行く。しよつぴんぐも……? の端の方の路地裏へと行く。

「うう…… すみません師匠。懸念していた事が……」

「懸念? 何かあったの?」

「…… 師匠。」

「何も言うな。そんな顔で伝えることなんて、あまりいい事では無いだろ。」

「ですが……」

今こそ……今こそ僕が先導する時。若宮さんの不安を取り除かなければならない。ただ、若宮さんはそもそもその髪の色を含めて目立つ要素が多い。ちよつとの施して解決するほど簡単なものでも無い。対策はある、けれどそれは今日気合いを入れて装いを磨いてきた若宮さんへの侮辱に当たる行為になってしまう。だがせめて……せめて髪型さえ変えられたら、どうにかなるかも……しれない。

「若宮さん、櫛持つてる？」

「櫛、ですか？ありますけど……」

「……髪型を、髪型だけ変えていい？今日のために整えたのに崩すような事になるんだけど……」

「全然大丈夫ですよ！別にこの髪型は普段よくしていますし!!」

「ありがたい。あとは……僕が持つてる眼鏡、これをかけて。」

「これは伊達眼鏡……ですか？」

「僕は使わないんだけどね……白鷺さんが持つていけと言うもんだから持つてきたんだけど……こんな形で役に立つとはね。」

「では師匠！お願いします！師匠の手で、私を変えてください!!」

「承知。」

「ねえ、あれ…… イヴちゃん、じゃない？」

「え…… まあ髪色とかそうだけど、あんなダサイ眼鏡かけるの？ モデルなの？」

「しかもあの髪型も、外国人らしいイヴちゃんの魅力を分かってないみたいない感じだよ
ね……多分似てる他人だよ。」

「だよな。イヴちゃんなら多分しないよな…… あれだけ写真とかだとクールだし。」

「大丈夫みたいだね。それにしても心外だな…… 僕は渾身の出来なのに、おかしく言
われて……」

「私は、この姫カットは大満足です!! 師匠、買い物へと参りましょうぞ!!」

若宮さんの髪型を…… 姫カット? なるものにした。平安時代より伝わっている髪
型に似たような形にした。

「師匠、髪を解く手が慣れていましたね!! 練習されたんですか?」

「昔、母や白鷺さんの髪の手入れを手伝った時に教えてもらったものなんだ。最近はや
らなくなっただけど、体は覚えてるんだ。」

そうやって話しているうちに服屋へとたどり着いた。長かったな……

「では師匠! あちらの試着室でお待ちください!! 服を持っていきますので!!」

そして若宮さんは楽しそうな目が、真面目な目になり、服の吟味を始めた。僕は指をさされた試着室とやらへ足を運び、その前で待つ。

「お客様、本日はどういった服をお探しですか？」

「私もそこは分かりません……連れの者が今私に合った服を選んでくれているんですよ。」

「あちらの外国人の方ですか？」

「はい。」

「いいですね。彼女さん、なんですか？」

「いえ、友であると共に師弟に似た関係です。」

「そうでしたか……ごゆっくりお選びください。」

店員さんも少し微笑ましいような顔をして去っていく。僕と若宮さんの関係……師弟といっても正確に門を叩いて弟子入りしてる訳でも無いし、友と言っても僕は若宮さんの事はほとんど知らない。

「師匠！第一陣です!!こちらを試着してみてください!!」

若宮さんが店員に何かを告げた後、服の山を両手で抱えてこちらに向かってくる。店員さんは何故か笑っている。

「お、多い……これは何着と……」

「えつと……ざつと20着くらいはあると思います!!」

「に、にじゆ……ちよつと多くないかな……? 20も持っているとはかのお客さんも見れないし……」

「それもそうですね……普段の仕事のノリでやってしまいました……。候補を絞るとなると、それだと……うーん、少しお時間を!」

そして僕の前で服を構え始め、悩み始める。そしてそこから8着ほどにまで数を減らし、残りは元のところまで戻した。その後試着を続けて、若宮さんの反応が良かった3着を買うことになった。複数買っておくべきとの事だけど……そんなに着る機会があるのかな。

夕方 帰り際

「今日はありがとう。色々お世話になったよ。」

「いえ! 師匠のお役に立てて嬉しいです! あの姿なら、チサトさんもきつと気に入ってくれます!」

「氷川さんといい、若宮さんといい……なんでここまで尽力してくれるの? 僕は特に何もしてないのに……」

「そんなに不思議ですか？」

「僕は単純に家族や協会の人以外の、こういう私的な付き合いを殆どした事が無いから…… 距離感とか、話し方とか分からないんだよ。」

「困っている方の力になる、ブシドーを歩む者として当然の事です!!」

「当然、か…… 白鷺さんも、そんなふうに考えてるのかな。」

「チサトさんも、師匠と話す時はとても楽しそうです!! 大事にしなきゃダメですよ師匠
!」

「うん、頑張るよ。」

心清らかなれば

「それで、上手くいきましたか？」

「多分……一応服は買ったし、着こなし方も若宮さんが絵にして渡してくれたから忘れても大丈夫なはず……」

「そうですか、安心しました。」

朝の稽古が始まる前の弓道場を綺麗にしながら氷川さんと雑談をする。僕は稽古がある日は基本的に朝早くして稽古場を綺麗にする習慣を付けているから早いのは当然なんだけど……なぜ氷川さん、こんなに早いんだ。

「不思議ですね。普段はあんなに意識が他所に飛んでいたり、若干だらしない風野くんがこういう時は必ず早いですよね。」

「慣れてるから。小さい頃から、こうやって朝に自分が稽古する場所を手入れするのは習慣のようなものだし、何より母からそう言われ続けてきたから。」

「出来れば普段の怠惰な生活の様を、お義母さまには治して欲しいものですね……毎回復装を整えさせられる私の気持ちにもなってください。」

「手を煩わせてごめんね……次からは白鷺さんに見てもらおうよ。」

「……別に嫌という訳では無いんです。ただ、シャキツとして頂いた方が風野くんにはしつくり来ますし、そっちの方がかっこいいですよ。」

(出来れば風野くんのこういう一面は私たちだけが知ってる方がいいですし……)

「そう……なのかな？ただなんと言うか……どうしても力が出ないんだよね。何も無い時は。毎日鍛錬は怠ってはいなんだけど、何でかそうじゃない時は体が全く言うことを聞いてくれなくてさ……」

「……ちよつと待ってください。」

「え？」

今まで作業をしていた氷川さんが手を止め、こちらを見る。その目付き、正に鬼神の如き……

「その理屈で行くと……風野くん、授業をちゃんと聞いていますか？」
「……………」

弓道場を静けさが支配する。受けてはいる、受けてはいるが……何をやってたかを思い出せない。氷川さんの冷たい視線が痛い。

「も、もちろん聞いてるよ……姿勢もちゃんと正してるし、聞いてる聞いてる……」
「怪しいですね。本当に聞いてますか？言っておきますが、音声を聞き取ることを言ってるわけではありませんよ？内容を理解しているかという意味での『聞く』ですから

ね。」

氷川さんは、どうしていつも僕を窮地に追い込んでくるのだろうか……白鷺さんのやりとりでこういう場面は結構あるが、追い込み方が氷川さんの方が激しい。白鷺さんは、逃げ道をひとつずつ潰していく策士だが、氷川さんの場合は一気に追い込んで後に引けない状況を作り出す。

「どう、かなあ……」

「その様子だと、おそらく昨日の授業で何を教わったかと怪しいようですね。あなたは様々な事をこなせる器用さはお持ちなのですから、もう少しそれを勉強にも向けて欲しいです。」

氷川さんは、はあとため息を付く。しかもこれでもかというほど大きめだった。

「うっ……ま、まあこの話はまた後でも出来るから……」

「それもそうですか……では風野くん、いつも通り髪を整えてください。」

「うん、分かったよ。」

朝の稽古の時は朝から気を引きしめるために氷川さんは髪を結ぶ。どういう訳かいつも間にか僕の仕事になってはいるけど……

（え、紗夜先輩可愛すぎでしょ……何あの顔。めっちゃ嬉しそう）

(あれで付き合っていないとかおかしいっしょ……)

(というか風野くんも風野くんっしょ。全然躊躇い無いのもやばいって。下心無さすぎでしょ。子供じゃん。)

(あ、分かる。なんかお母さんのお手伝いしようとしてる子供みたい。)

そしてその朝の準備の一連の光景を見ることが後輩たちの日課のようなものになっていた。

—————

昼休み 屋上

「…… という訳で、白鷺さん。お手数ですが、出来れば1日の終わりに風野くんにその日に習った事を復習するよう促してください。」

「うーん？それはいいのだけれど…… 紗夜ちゃん、いくつか看過出来ないことがあったわよ。」

「そうですか？別にやましい事は何もしてはいませんが……」

紗夜ちゃんは、無自覚だった。大丈夫かしら、風紀委員なのに風人くんへの風紀メーターがちやんと作動していない。

「まず、早朝に風人くんと2人きり……？私なんか、場合によっては朝に顔を見られない日もあるのよ？風人くんも挨拶くらいしてくれてもいいのに……」

「ちよつと待つてください！決してやましい意図があつて朝会つてる訳ではありませぬ……風野くんが朝早くから清掃をして準備をしているのを知つて感心したんです。ですから私も彼に見習つて、きちんと行動しようと思つたんです。」

「なら部全体でやった方がいいんじゃないかしら？弓道場の清掃はどう見ても2人で出来るキャパじゃないと思うのだけれど。」

「確かにそれはそうなのですが……私たちが自主的にやつている事をわざわざ他の皆さんに強制するのはいけませんし。何より……」

「何より？」

「なんと言うべきか……風野くんと準備をしている間は、不思議と心が晴れていくんです……雑多な中練習するのは違つて、静けさと朝の涼しさがある中にいることが合うんです。それに風野くんの所作がどれ一つ取つても端正で……見ていて、心が自然と清らかになるんです。口を開けばいつもの風野くんになりますけど……」

待つて。想像以上にギルティだった。私は今、無自覚な惚気話を聞かされていたのかしら。確かに風人くんは、そのだらしない所を除けば本当に見えて無心の境地に達しているのか、まるで別人のように見違える。実際私も家に言つて稽古場を清掃している風人くんを見るとそういう気持ちになる。けど、私以外にもこの気持ちを持つてる子がいるなんて……それ、惚れてると一緒なのよ。やはり紗夜ちゃんは最大のライバ

ル……

「それはそれとしてあのだらしなさはどうかと思います。あそこまで落差が出るのもどうかと思いますし、何より授業を理解して聞いていないのは大問題です。しかしどうしてあそこまでON/OFFの落差が激しいんでしょうか。風野くんは決して要領が悪いわけでもないですし……」

さつきまでの表情が和らいでいた紗夜ちゃんがいつもの毅然とした紗夜ちゃんに戻った。後輩の間で紗夜ちゃんが人気なのはこういう所もあるかもしれないわね……

「要領、すごく悪いわよ。」

「そうなんですか？白鷺さんがそう言うならそうなんでしょうか……」

「風野家で学ぶべき事や、武道や作法に関しては天才と言つていいほど吸収するの。でも何故かそれ以外が壊滅的な。あ、あとおせち料理とか恵方巻きとかも作れたからそこは抜いておかないと……」

「……つまり、特定分野での才能は突出しているけれど、それ以外はてんでダメ、という所ですか。」

「そういうことよ。おそらくお兄さんの影響もあるだろうけど……今はあの人は風野家にはいないし、分家の香奈ちゃんはしっかりしているから本当に何でかしら……」
謎が深まるばかり。普通真面目な性格ならどんな方向にだって手は抜かないし、器用

な人なら最低限はこなす。

「とりあえず、この件は白鷺さんにお任せします。白鷺さんの方が私より風野くんの事を分かっているでしょうし。」

「ええ、任せて。でも女優で忙しい時もあるからその時は紗夜ちゃんにお願いするわ。」

「はい。家に来てもらって出来るまで返さないつもりでやります。」

家に異性をあげる事になんら危機感を抱いていない紗夜ちゃん……確かに風人くんは他人の家で異性を襲うような獣ではないけれど……私なんて長い時間共に過ごしている筈なのに進展がひとつもない。朴念仁にも程がある。

「そ、それはどうかしら……日菜ちゃんもいるのだから、やめておいた方がいいと思うわ。意外かもしれないけれど、風人くんって私の家にあがったこと殆ど無いのよ。」

「そうなんですか？ てつきりもう何度も経験があると思っていました……」

「年始におせちを渡しに玄関に来ることはあってもあがったことは無いわ。理由分かるかしら？」

「やはり女優であることを隠すためですか……？」

「それもあるけれど……別の理由よ。」

「別？」

「…… 風人くん、インターホンを使えないの。」

「え……」

「インターホンを使えないから、まず私たちに来たことを伝える方法が無いのよ。」

「ノ、ノックをすれば良いように思われますが……」

「確かに門を叩けばいいのよ。ただ風人くん何故かそれをしないのよ。」

「少し抜けてませんか……？ではどうやって。」

「鷹よ。」

「鷹？」

「私の部屋、上の階にあるのだけれど…… 鷹を遣わせて2階にいる私に知らせるの

よ。」

「ええ……」

さすがの紗夜ちゃんもドン引きしている。それはそう、私も最初にやられた時は魂が抜けるかと思っただわ……。だって本を読んでいたら、いきなりデカイ鷹が窓の前でこつちを見て飛んでいたの。

「…… 英語以前に、常識から教えた方が良いですね。」

中間考査

風野家

「風人くん……少しは成長したようね。」

「……何点？」

「13点。」

「あつ……」

テスト週間というのもあり、風人くんの家に泊まり込みでテスト勉強をしている。泊まり込みで。

「50点満点のテストだから、そこまで落ち込む事では無いわよ。前やった時は0点だったから大きな進歩よ。」

「だ、だよね。」

「とはいえ、まだまだ足りないわ。目標は30点。まずは6割を超えなければいけないわ。花咲川のテストの平均点は基本的に60点なの。赤点が平均点の2/3の数値だから、約40点。」

「な、なら40点でも……」

「何を言っているのかしら？平均点が変わったらその分赤点も変わるの。というより……普段武道とかに向けてるやる気を向けなきゃダメよ。」

「うっ……それが、どういう訳か苦手な物に対しては極端に苦手なままで……」

それは私も知っている。風人くんが家業に対しては天才的な吸収力と、集中力を出す。だけど……それ以外が本当にダメ。生活録を使ってもまともに日常生活をこなせない……本当にどうなってるのかしら。

「……どうしてこうなるのかしら？」

「それが僕にも……おそらく、幼い頃から全く関わって来なかったからかな……」

「確かに驚くほど遮断されてたものね……どうにかしてその壁を壊さないといけないわね。」

必ず壊さないといけない。元々風野家つて、いわゆる空手道場や茶道教室も含めて……そういった武道や華道とかで教える師範や先生を、協会と連携して育てることも仕事に入っている。時々海外遠征もしていて、今家に風人くんが1人なのはそれが理由。ということとは英語なりなんなり……外国語が出来ないことには話にならない。いずれ妻になる身として……これは解決しないとイケない。

「テスト形式でしていてもダメね……実戦形式でいきましょう。」

「実戦？」

「紙の上で書いてそれを覚えても、体系化出来ない場合、風人くんには合わないかもしれないの。だから今から実験として…… 実戦の中で入れ込む形で行くわ。」

「ちなみにどうやって……」

「しのごの言わないの。ついてきて。」

弓道場

「あの、白鷺さん…… 何故弓道場に。」

「とりあえず、身近にあるものを英語で紹介してみて。後、今から私に物事を聞く時も全部英語でお願いね。」

「ちよ、ちよつと待ってそんないきなり……」

「いいからやりなさい。私がいつまでも甘々だと思ったら大間違いよ。」

「お、ok…… (とうか全然甘くないよね……)」

心を鬼にして風人くんに言い聞かせる。突然の難問に慌てふためく風人くんの顔も可愛いわね…… 新しい扉が開きそうだわ。そういう可愛い反応する方がいけないのよ。

「W、well……」

「とりあえず、私に身の回りにあるものを説明してみて。それから、普段過ごしているこ

とを英語で。難しかったら日本語を時々入れてもいいから。」

「ええと…… あつ、これ！」

風人くんは矢を持ってきてこつちに見せてくる。何このフリスビー取ってくる子犬のような純真さ……

「What's this?」

中学一年生レベルであるがここから始めてみる。

「This is……」

【悲報】風人くん、arrowが思いつかない。まあこれは記憶の問題だからそこまで気にしなくていいわね。

「This is arrowね。まあbe動詞は大丈夫みたいね。じゃあ…… そうね。What are you going to do after this?」

この後の風人くんの予定は、道場の清掃、私と一緒に晩御飯の支度、仏間の供え物、…… ざつとこんな感じかしら。さてどう英訳するのかしら……

「……………」

黙り込む。そんなに難しい質問したかしら。

「えつと…… 風人くん、どうかしたのかしら？」

「…… 道場が分からない、よそうって英語でどう言ったらいいんだろ？」

「あ…… そんなに難しく考えなくても良いわよ？ 普通に、I, m going to
o clean up the dojo. とか。I, m going to
make supper. とかね…… 普段使ってる日本語と、英語の切り替えが難

しいのと、おそらく頭の中でまだ意味のリンクみたいなのが出来てないのかしら。」

「そう、なのかな……？ 何を言っているか分からないけど。」

「(ならまずはこちら……) 風人くん、しばらくはこれが続けましょう。おそらく初歩的な学習を始めるのは、頭の回路をちゃんと作ってからの方が風人くんはしつかりと学べるはずよ。」

そうして、風人くんの英語混ぜ合わせ生活が始まった。本当なら平均点くらいまでは勉強して欲しいという本音はあるけれど…… 急いで事は仕損ずる。出来れば6割、及第点として4割、を目標として勉強を開始した。

—————
 考查前日 3—A教室

「……………」カリカリ

「集中していますね……白鷺さん、よくここまで。」

「風人くんの為だから、苦痛は無かったけれど……疲れたわ。」

「前までなら、数分でもう意識がどこかへ飛んでいましたからね。大きな進歩です。」

私と紗夜ちゃんの監視の下、放課後に最終確認のテストを行っている。数日間、ひたすら英語に触れさせた事もあっていつもより風人くんは集中して問題にあたっている。シャーペンも最近はやんと使えるようになってきている……。たまに筆みたいな持ち方をする癖は抜けてないけれど。

「……専門外の事は基本的に何も出来ない、という認識は改めるべきでしょうか。」

「いえ、まだ変える必要は無いわ。今回は私が半ば強制的に環境を整えたもの。まだ風人くんが自分の意思で、自発的に始めて終わらせられるようになるまでは時間がかかるでしょうし……。」

「普段と違って、随分と厳しい評価を付けるのですね。」

「勿論、今回の成長は褒めるべきことではあるわよ。ただ風人くんは、ちゃんと成果が出てから褒めないとな得しないところがあるから……。特に、テストみたいな目に見える結果が現れるような物は。」

「本当に詳しいのですね……驚きました。」

40分後

「終わったよ。」

「えつと…… 47分22秒。試験時間が60分だから、時間配分は上出来ね。それと…… 解答欄は、かなり埋まつてるみたいね。」

「では採点をしますので少しお待ちください。」

そして解答用紙を紗夜ちゃんが受け取り、慣れた手つきで採点を始める。○が続くところもあれば、☒が続くところもある。記述問題は細かく印を付けつつ採点をする。紗夜ちゃん、すごいわね……

「おぉー…… あっ」

○が付いたり☒が付いたりすると同時に風人くんが小さな声を出す。特に自信があつたであろう問題が間違いだと分かると、目に見えるくらい落ち込む。子供みたくで可愛い。紗夜ちゃんもそれが聞こえてくると少し微笑む。母性、感じてるのね（敵意）。「終了しました…… 風野くん、進歩はしていますね。」

「ちなみに、何点?」

「46点です。100点満点でこの点数なら、申し分ない成長でしょう。よく頑張りましたね。」

「はあ…… 良かったあ……」

「これならなんとか赤点は逃れられそうね。それにしても…… 1週間近くでここまで変われるのは驚きよ。中学の時からこうしておいたら良かったかしら。」

「僕の頭もそろそろ限界……」

「しかし、本当に謎ですね……。 1週間という短い期間でここまで変われるというのに、この実社会への疎さはどこから……。 もしかしてずっと家の中に閉じ込められていたんですか？」

「いや、別にそういう訳じゃ……。」

「それはまた、火凧さんが帰ってきたら聞いておくわ。とりあえず風人くん、間違ったところを総括して明日を迎えるわよ。」

「うん。」

補習の時だけ異様に優しい先生

先生「よし、風野。まずはこの問題からだな。」

「は、はいい……」

結論から言うと同間考査は落ちました。点数は46点。一見すると赤点を回避しているように見えたが、学年平均は70点だった。その3分の2は46・6点。先生は四捨五入で47点を赤点のボーダーに定めた。つまり、ぎりぎり引かかったのである。

先生「今回は風野も頑張ったが、あと少しだったな……にしても、1年の学年末の英語の点数が1桁だったのに4ヶ月ちよつとでよく立て直したな。」

「白鷺さんや氷川さんが教えてくれたんです。ただ、そのおふたりの力をお借りしてこのザマですから……まだまだですよ。」

先生「へえ…… 氷川はともかく、白鷺まで協力したのか。」

「そうですね……」

先生「珍しいな…… 白鷺って普段忙しくて遅めに登校する事も多いくらい忙しいんだ。先生もいくらか授業は持ったことあるんだが…… 松原以外と話すところはあまり見ないな。」

「それが意外とそうでも無いですよ。松原さん以外でも氷川さんや若宮さんとも交友はあるみたいですし。」

先生「よく知ってるな……ほら、手が止まってるぞ。」

「あ、すみません。」

先生と雑談をしながら「50問正誤問題」という補習課題を進める。これを1週間(土日込)続けてやれば宿泊研修にも間に合うように措置を取る、と先生は明言していた。それもあるのか、補習になった生徒も数人来ていたが、皆すぐに終わらせて帰ってしまった。今いるのは僕ともう1人。もう1人の桃色の頭の子はとてつもなく悩んでいるのが目に見えるほど苦戦している。

先生「丸山の方は……まだ8問目じゃないか!？」

彩「だ、だって分らないんですよ先生!」

先生「風野ですらもう20問目にいつてるんだぞ!!」

彩「え?! 風野くんが20問目まで!!」

「先生、さらつと僕を馬鹿にしてませんか……?」

さらつと毒を吐く先生とそれに驚く桃色の髪の子。2人して酷いな……

先生「うーん……先生、ちよつと一旦職員室に戻るから、2人で協力したり単語集と
か見ながらでいいから進めといてくれ。多分しばらく終わらないだろうから休憩した

い……」

時計を見て少し走り気味に職員室に向かう先生。最後に本音が漏れていた。そして課題の紙と単語集を持って僕の隣にとことこやってきて座る桃色の髪の子。雰囲気は大人びていたが、顔を見ると幼さが少し残っている。

彩「えーと…… よろしくね風野くん。」

「あ…… うん…… 君は？」

彩「あ、そっか。丸山彩です。1年生の時はクラス一緒だったけど覚えてる？」

「1年生…… ごめん、覚えてない。」

彩「あちゃ…… 自己紹介頑張ったんだけどなー。」

「芸術選択って何にしてた？」

彩「音楽だよ♪風野くんは書道だったよね？」

「うん。書道の先生もやってる。元々は書道の先生がいた筈んだけど…… 定年と、新しい教員を探す時間が足りなかつたらしくて…… 誰も空いてなかつたんだって。」

彩「だから風野くんが代わりでやってるんだ…… 凄いな！ やっぱり達筆なの？ こ
う…… シュババって感じで！」

身振り手振りでごちらに伝えようとする丸山さん。感受性が豊かで、白鷺さんとは対照的なんだなと感じる。

「えっと…… どういう感じ？」

彩「あれ…… ほら、合気道みたいな服着て、広い場所で大きな筆持つてやるやつ！こ
う…… 字が豪快に書かれてて。」

「ああ…… 合気道の服とあれは全然違うけどね。確か描いたやつは誰かが持つていつて
たかな……。」

彩「そ、それって市長とか凄い人なんじゃ……。」

「よく分からないけどね。飾りたい！って言うし、披露した後だからいいかなって。」

彩「それ絶対凄い人だって！！へえ…… 千聖ちゃんの言う通り凄い人なんだね風野く
ん。」

「白鷺さんの事を知ってるんだ。」

彩「うん！今は一緒に活動してるんだ！すっかりしてて凄いんだよ！」

「それは僕も重々分かってるよ……。」

何度生活面のだらしなさを叩かれた事か…… 本当に助けられている。

彩「風野ちゃんと話してる時の千聖ちゃんってどんな感じなの？」

「そうだね…… 簡単に説明するのが難しいんだけど…… まず初めに浮かんだのは礼儀
正しいところかな。」

彩「確かに！千聖ちゃん、（撮影の）現場で初対面の人と会っても動じずに挨拶してる

んだよ。」

「確かに……（出稽古で協会の重役と会っても確かに動じていなかったな）」

「やっぱり白鷺さんの知り合いだけあって、そういった話も聞いているんだな……」

彩「後はどんな感じ？」

「すごく献身的な所かな……朝家に入ってきて起こしに来たり、家の中の道場の清掃とか、食事作りの手伝いもしてくるし。」

彩（あれ……？ 思った以上に親しい……？ しかも家……！！）

彩「ちよ、ちよつとストツプ！！え？ 家？ 普通に入ってるの！！？」

「え？ うん……うちって屋敷みたいな感じだからさ。庭から入ろうと思えば入れるんだけど、律儀に渡した合鍵で入ってきて……」

彩「そ、そういうのじゃなくて！！普通に庭から入ったら犯罪なんだけど……そ、そういう事でもなくて！！そんな……か、通い妻みたいなの……ダメだよ！！（アイドルとして）」

「だ、ダメなの？（普通に親しい間柄なのに……？）」

丸山さんが想像以上に慌てている。もしかして……僕が知らないだけで、何かダメなことしてる……！！？

彩「あ、あのね風野くん。よく聞いてね。」

丸山さんが僕の肩を掴み、顔をちかづける。迫真に迫った顔をしている。

彩「風野くん、世間に疎いから知らないかもだけど……高校生になつたらね、よっぽど親しい間柄……それこそ恋人くらいじゃないと異性を家に招かないんだよ!!」

「そ、そうなんですか?」

彩「そうなんだよ!! (じゃないとスキャンダルに撮られる!!)」

「でも以前、氷川さんの家にも行ったことあるし……」

彩「日菜ちゃんの家……? あれ、もしかしておかしいの私……?」

再び混乱し始める丸山さん。心に思っていることがこうも目に見えてわかる人というのも珍しい。

彩「と、とりあえず風野くん、よく聞いてね。女の子との距離感を間違えたら、関係が拗れるかもしれないから!! 適切な距離を取ろうね!!」

「う、うん。」

今が適切な距離かが疑問ではある……とりあえず離れてみよう。

彩「ま、待って! まだ話終わってないから!」

離れようとしたら丸山さんに肩を強く掴まれ引き戻される。ふわつとかすかに甘い匂いがする。

彩「あのね、仲が良いのはね、良いんだよ。問題なのは相手!! 千聖ちゃんとあんまり

近すぎると大変な事になるんだよ!! (スキヤンダル)

「大変な、事…… (確かに近すぎると自然と依存しそうになるかも……)」

彩「特に、千聖ちゃんの色んなところで顔を知られるから、尚更大変なんだよ!! 現場とかではいつも千聖ちゃんは注意してるし!!」

「なるほど……」

つまり、白鷺さんは多くの方面で顔が知られていて、僕との関係が露呈することは白鷺さんの損に繋がる…… ということ。確かに納得はできる。あれだけ周りに目を向けられて献身的な人はなかなか居ない…… それこそ分家の香奈はそれに近いけど、香奈の場合は育ちがそうだから。白鷺さんの場合は育つ中で特別な躰を受けている訳でもなく、元からあんな感じ…… 確かに惚れる人がいてもおかしくないし、惚れている人からすれば僕は敵の1人なのかもしれない。

「でも…… やっぱり厚意を無下には出来ないよ。」

彩「あ、勿論千聖ちゃんを追い返せって言ってる訳じゃ無いからね! 仲が良いのはいんだけど、ちよつと良すぎると周りから勘違いされちゃうから……」

「忠告ありがとう。気をつけてみるよ。」

彩「こつちも無理言つてごめんね。」

「そういえば…… さつき現場って言ってたけど、白鷺さんってそれで普段は忙しいの

？」

彩「え？うん、そうだよ。だって千聖ちゃんは……（あ……これ口止めされてたん
だっけ……？）」

「白鷺さんは？」

彩（ど、どうしよう……流れ的に無かった事には出来ないし、かといつて千聖ちゃんからは女優兼パスパレである事は隠しておいて欲しいって言われてるし……あーバカバカ！なんで現場なんてうっかり言っちゃったのー!!!）

「ど、どうかしたの？」

丸山さんの焦り具合が最高潮に至っている。そんなに言うともまずい事なのだろうか……

彩「え、えつとね！えつとえつと……」

「……言いつらい事だったら言わなくていいよ。」

彩（良いの？って言いたいところだけど、風野くんに疑惑を持たれたら嫌だからなんとかごまかさないと……!!）

彩「だ、大丈夫！えつと……千聖ちゃんはね、外部の演劇の指導をやってるんだよ!!」

「外部の、指導？」

彩「千聖ちゃんはね、演劇がとても上手なんだ！」

「やつぱりそうなんだ…… 以前、共に能を見に行つた時に沢山感想を述べていたから。でも僕そんな事一言も聞いた事無かつたな…… 話してくれてもいいのに。」

彩「ほ、ほら！千聖ちゃんつて謙虚だから！そんな他の人に演劇ができるとか、外部がゝつて言わないんだよ!!」

「なるほど、確かに……」

丸山さんの説明を受けて腑に落ちた。僕は立場上、必ず自己紹介をしないといけない場面が多いから気づかなかつたけど…… 普通の人は聞かれない限り言わないのが普通だよな……

彩「ふう…… 伝わつて良かった♪」

丸山さんが落ち着いて息を吐く。でもよくよく考えたら、白鷺さんはちゃんと自分の中身を気兼ねなくさらけ出せる友人が…… 丸山さんや松原さんのような人がいる、ということになる。それがどこことなく嬉しかった。

「うん、ちゃんと理解出来たよ。ありがとうね丸山さん。」

彩「うん♪あ、あと彩でいいよ！丸山さんつて同級生から言われるのちよつとかゆいから……」

「呼び捨ては…… では彩さんで。」

「さん付けかあ…… えへへ。それもいいかな♪じゃあ私も、風人くんつて呼んでいいか

な？」

「はい、()自由に。」

随分お気に召した様子だった。この人は明るくて…羨ましい。こういう明るさや気さくな所が白鷺さんには居心地が良いのだろう…：

「僕も白鷺さんには肩の力を抜いて欲しいし…： どうやったらいいかな？」

彩「うーん…：（千聖ちゃんを見る限り、風人くんと一緒にいる時が1番楽しそうなんだけどなあ…：）」

彩さんが随分と悩んでいる。それはそうだ、この人は意図してこんな人柄を形成した訳では無い…： 根っからの優しく明るい子だろうから、意識なんてした事が無いのだろう。

彩「風人くんは風人くんのままでいいと思うな。千聖ちゃんと話しても、風人くんの話をしている時の千聖ちゃん、とても嬉しそうなんだよ。」

「そうなの…：？」

彩「うん!!人それぞれだし…： 方法とか無いと思うよ。男女の距離の違いもあるし、風人くんと千聖ちゃんの関係は2人だけの物だから！」

彩さんから助言をもらう。こういう親身なところも見習わないとな…：

「ありがとう彩さん。頑張ってみるよ。」

彩「うん！あ！あと……」

彩さんが元の位置に戻って、改めてこつちを見つめる。

彩「今日話したことは…… 2人だけの秘密！だからね！」

「うん。約束するよ。」

シーつとしながら目配せをする。可愛い。

「あと…… もし何か悩んだらいつでも相談乗るから、連絡先渡すね！」

彩さんがメモ帳の1ページを切り離し、何かを書き出し、僕に渡す。番号と、ID……なるものが書いていた。

「これは？」

彩「え？電話番号とSNSのプライベート用のIDだけど…… まさか。」

「僕、これが何か分からない……」

彩「あ、やつぱり…… お父さんお母さんは？」

「今は海外で、日本文化の教室をやっている方々の指導を。」

彩（こういうのって親御さんいないと契約出来ないしな……）

（彩さんが悩み出した…… 本当に表面に出て分かりやすい……）

彩「家に固定電話ある!? それくらいはあるよね!!! 風人くんの家、道場の人達とも連絡

先取るだろうし!!」

彩「が、頑張つて進めよう!!怒られるのはヤダ!」

その後、彩さんと必死になって問題をすごい速さで進めた。しかし先生は当然のごとく焦つてやったことを看破し、2人とも怒られた。

宿泊研修1日目：しょうがない事もあるよね

京都 嵐山 昼

先生「では、早速宿泊研修について説明します。今回の宿泊研修の目的はただ1つ、皆さんの交流を深める事です。仰々しい名前の行事ではありませんが、今日と明日の2日間はそのういった事を忘れて楽しんでください。これから事前に決めた班で行動し、17時にはホテルまで帰ってきて下さい。では解散！」

千聖「風人くん、来れてよかったわね。」

「…… どうしましょう。」

千聖「どうしたの？」

「宿泊研修と聞いたもので…… 思いつきり教材を持ってきてしまいました。」

千聖「えっ……」

花音「ほ、ほんとに持ってきたの？」

「はい…… これ。」

風人くんが背負っていた袋を開き、中身を見せてくる。確かに、今朝チェックした通り、何もいじられていない。

千聖「私が確か行く前にちゃんと荷物は一通りチェックしたはず…… おかしいわね…… 風人くん、事前にしおりは渡したわよね？」

「はい、これですよね？」

千聖「ええ、それよ。その持ち物欄、ちゃんと見た？」

「勿論です。この通り。」

勿論、必要なものは持つてきている……。しかも家も一緒に出たのに、一体どのタイミングで……

千聖「尚更分からないわ……。一体どのタイミングで教科書が入ってきたの……」

花音「だ、大丈夫？結構重くない？」

「大丈夫ですよ。この程度なら、幼少期の時に付けていた重しに比べたら全然です。」

花音「良かった…… と、ところで風野くん。その、後ろにいる人は……？」

「後ろ……？」

そして、さつきから風人くんの後ろには以下にも使用人のような男性が控えている。この頼りなさのせいでよく忘れていたけれど、風野家つて格式ある一家なのよね…… しかも、日本文化に精通している職人や達人、師範代とは軒並み顔見知り。

緒方「はっ、自己紹介が遅れました。私は緒方宏光、本日の来賓である風野風人様の送迎と身辺警護をしております。」

花音「あ、ど、どうもよろしくお願いします…… 使用人つて凄いな。」

「本日は何から何まで準備していただきありがとうございます…… 私は自分で自分の身は守れますので、今は下がって休憩していただいて構いませんよ。」

緒方「しかし…… ご主人様がくれぐれも風野家次期当主様にお手を煩わせるような事が無いようにもてなせと……」

花音「もてなす、つて事は…… 風野くん、もしかして泊まる場所一緒じゃないの？」

緒方「はい。宿泊する場所や食事も含めて、本日はこちら側で全て準備しております。」

「……………」

風人くん、絶句。

「どうして、そこまで……」

緒方「ご主人様曰く『あの家のご子息は電子機器を扱うことすらままならない。おそらくだが、宿泊研修の旅行金を払うことが出来ていないであろう。だから我が家から宿泊場所を提供しなければならない』との事です。」

…… 忘れていた。風人くんの両親が今海外にいて、しかも振込関連は入学の時だけやっていた。そのせいか、お金は払っていない…… 完全に見落としていた。

千聖「じゃあ、風人くんだけバスに乗らずに送迎車に乗っていたのも……」

緒方「はい、お金を払っていないからと。」

花音「じゃあ、ご飯とかも……」

緒方「別々、になりますね。」

「そ、そんな……」

風人くんが目に見えるくらいに落ち込む。それはそうだ。昨日も『普段のような合同稽古や仕事じゃない用事で京都に行く』とかなり喜んでいた。風野家次期当主とはいえ、風人くんも年頃の男の子。私が外の世界に連れ出して色々としていく内に、興味も湧いてきたのだと思う。

緒方「心中お察し致しますが、風人様。御身はそういう立場にあり、風野家は国も認める日本文化を継承する貴重な家なのです。その当主たるあなたを放つてはおけないのです。」

「…… お金払ってないなら、別々なのは仕方ないよ。ところで、肇さんはその、自由時間には別にいいって言ってます?」

緒方「はい。そちらに關しましてはお楽しみくださいとの事です。」

「良かった…… それもダメかと思つた。」

風人くんの落ち着いた表情を見た後、花音と目が合う。花音もおそらく同じことを思っている。

千聖・花音（絶対、風人（風野）くん楽しんでもらおう……！！）

千聖「緒方さん、少しよろしいですか？少し、プランを練っておきたくて……こちらに住んでる方の知見をお借りしたいのですが。」

緒方「はい、お任せ下さい。」

花音「よ、よろしくお願いします！風野くん、ここでちよつとまつてて！そこのお店でソフトクリーム食べてていいから。」

「あ、えつと……」

風野くんに一旦お店にいてもらうよう頼み、緒方さんとテーブルのある所でプランの話し合いをする。

30分後

千聖「行くわよ風人くん。プランは練れたから私たちに付いてきてもらうわ。」

「……………」

花音「風野くん、どうしたの？」

「……………」
ソフトクリームって、どれ？」

千聖・花音『……………』

毎度の事ながら、どうしてここまで世間に疎いのかしら……。火凜さんは一体どん

な教育を……

緒方「風人様、こちらがソフトクリームとなっております。」

「あ、ありがとうございます……。」

千聖「……風人くん、食べながらでいいから行きましょう。それ、持つてるところも食べられるから全部食べたらいいわよ。」

「あ、ちよ、ちよつと待つて！今食べ終わるから……。」

ソフトクリームのコーンを一気に口に入れ、1回噛んだだけで全部粉々に噛み砕いて飲み込んだ。すごい芸当ね……

千聖「じゃあ、行きましょ！」

花音「うん、行こう！」

私と花音で両方からがっちりホールドして連れていく。折角楽しむもの。これくらいのスキンシップは許されるわよね。花音もいるのだから、週刊誌とかの目を気にする必要も無いし。

数時間後

千聖「旅行先が嵐山で良かったわ……移動で電車に乗る事がほとんど無くて。」

花音「道が真つ直ぐな所も多いよね。」

緒方（こうは言っていますが、この御二方、恐ろしい程に遠出に向いていない……）
緒方さんがこちらを疲れた目で見ている。言いたいことは分からなくもない。花音は回っている時に何回もはぐれそうになったし、路線の話になった時に私が真反対の方向や方面を話したりした……。おそらくそれね。

緒方「……この際失礼を承知でお伺いしますが、皆様、遠出の経験はどれほどあるのですか？」

「僕は何度も……国内だけけどね。」

花音「遠出する事はハロハピに入ってから多いけど……皆がいるから大丈夫なんです。」

千聖「私も何度も。もちろん時間に余裕を持って出かけてますよ。」

緒方（では何故それで迷うのですか……）

緒方「回答いただきありがとうございます……風人様、そろそろ時間です。」

「もう時間か……もう少し回りましたか。」

緒方「またいらしてください。私用であっても、私を呼んでくだされば喜んで案内しますよ。」

「緒方さん…：先に、この2人を集合場所に送ってあげてください。」

緒方「はい、もちろんそのつもりです。皆様を送迎いたします。車は準備出来ていますのでどうぞお乗りください。」

花音「いい、良いんですか？」

緒方「はい、もちろん。」

千聖「では、ご厚意に甘えて。ありがとうございます。」

花音「よ、よろしくお願いします。」

緒方「では参りましょう。こちらです。」

その後、緒方さんの運転する送迎車に乗り、集合時間の15分前にホテルに戻る事が出来た。改めて風人くんが普段どんな世界にいるのか思い知らされたわ…：

九条家 居間

肇「お久しぶりですな、風人殿。また一段と遅しくなりましたな。」

「肇さん、お久しぶりです。そちらもお変わりないようで。」

宿泊研修1日目夜：相見える

「肇さん……まずは本日は宿泊場所の提供、本当にありがとうございます。」

「気にせずとも。これも未来の風野家の当主への恩を売っておくと考えれば安いものです。」

「ははは……相変わらず、実利的な所は隠さないのですね。」

「なに、冗談ですとも。火凧殿の前ではこのような砕けた話は出来ませんからな。それに、我が九条家は代々この京都の地で建築文化を継承してきている家ということは風人殿も大いにご存知だろう。」

「ええ、存じております。」

「ま、そのせいかどうかしても仕事にお金が絡んできましたな。」

「そうですね。」

「もし風野家が地震か何かで家が倒壊したら、建て直しには力を貸しますぞ。」

「そうですね……九条家の事は信頼しています。もしそのような事が起きた時は是非頼らせてもらいますよ。」

「これで縁が出来ましたな……しかし、本当に見違えましたな、風人殿。林政殿がい

なくなられてから、凜々しくなられた。」

「そう、でしようか。」

二人の間に重い空気が流れる。風野風人の兄、風野林政を知る人は数少ない。そして長い間、風野家の人間相手に林政の話をするのはタブー視されていた。ある日突然消えた人間のことを。

「多くの者は林政殿の事を話すことを憚っておりますが、わしは関係なく話しますぞ。そちらの方が風人殿も良からうて。」

「私は全然構いません。しかし気をつけてください。それを父や母の前で話せばどうなることやら。」

「勿論ですとも。風人殿は懐が広いですな。たまにはこんな肩肘を張らずに食事をするのも、良いものですな。」

「ですね。私は出来れば同級生と食べたかったです……。」

「わはは、良いではないですか。同級生と食事など、大学に行けばいくらでも出来ますとも。火凧殿も、大学までは進学を許可しておるのでしやう？」

「そう言っていました。教養を身につけることも大切と。」

（教養、ねえ……世間を全く知らないこの子供に教養とは、中々な仕打ちですな。）

茶碗をコトンと置き、肇は風人を見据える。体はまだ成長途中、肝が据わっている、所

作一つ一つが自然。しかし、どこかが欠落しているように肇に見えた。肇にはそれがどこか不気味に感じた。

「…… 風人殿、一つお伺いしたい。今後、何かしたいことはありますか。」

茶を啜り、これまでの陽気な雰囲気から真面目な大人の顔になる。風人もその雰囲気を感じ、食器と箸を置き、肇と向き合う。

「風野家の当主を継ぎ、家の使命を果たすつもりです。それ以外はありません。」

「ほう…… 世継ぎは？」

「…… 特に考えてはいません。父や母が見合いを用意するかと。」

「本当にそれで良いのですかな。」

「不満はありません。誰であろうと、配偶者は大切にするつもりです。生まれなどで冷遇するなどはあってはいけません。」

「そういう事では無いんだが…… まあ、それならそれで。もし、風野家の生まれで無ければどう考えていたんでしょうな。」

「分かりません。どうだったんでしょうか。」

「…… 随分と、良い教育を施されたようですね、火凧殿は。当主として何ら文句のない心構え。」

「お褒めに預かり光栄です。母にそのように伝えておきます。」

皮肉が通じなかったことも含め、肇は呆れたため息をつく。風野家は伝統ある家ではあるが、厳格ではある。が、ここまで厳しく躰られ、人生観が家の使命しか無い人間を初めて見た。

「ご馳走様でした。とても美味でした。」

「お粗末さまでした。明日は何時にどこ集合ですか。」

「辰の刻だったと思います。」

「後で緒方にしおりを見せてください。時間に合うようにお送りしましょう。寝室はこの上の階の奥の部屋です。勿論、縁側でくつろぐなど自由にしてもらって構いません。」

2階 寝室

「この時間と集合場所であれば…… 30分あれば到着します。出る時間に関しましては午前8時30分にしましょう。それでよろしいですか？」

「二任します。土地勘が無いもので……」

「土地勘が無い？失礼ですが、お話を伺った限り京都には何度も足を運んでいるはずですが……」

「1人で京都に来たのは始めてです。僕がどこかに行く時は決まって父母のどちらかか、香奈が同行するのが常でしたから。最近だと白鷺さんと行くこともありまし

て……特に、こういった学校行事で来ることもある意味初めてですから。」

「中学時代は何を？」

「中学時代は……家業を優先していましたので、こういった行事は全て休んでいました。家の用事の際も、基本は公欠でしたし。」

「……すみませんでした。不躰なことを聞きました。」

謝罪する緒方に「気にしていませんので大丈夫ですよ」と風人は軽く返す。事実として、本当にそうだった。今でこそ、シャープペンシルやアイスクリームといったものが分かるようになってきた頃合である。分かるようになったといっても見覚えがある程度のうろ覚え程度であつたが、それでも進展はしていた。

「兵藤香奈さんの事は存じ上げております。」

「香奈を……？確かに色々な所に顔は出しますが……」

緒方の言葉に風人は驚く。兵藤家も風野家と同様に様々な日本文化を嗜む家。しかし兵藤家が単体で表に出ることはなく、出る際は基本的に風野家の人間と一緒というのが昔からの習慣だった。

「はい。肇様がお話するところには、その美貌が多くの当主から目をつけられていると……育ちもよく、気品もあり麗しいお方であり、水面下で娶る争いが起きているとの事です。」

「そのような事が。知りもしませんでした……心配する必要は無さそうですね。」
「それは何故？」

「香奈には白鷺さんがいますし、兵藤家現当主の夫妻は香奈の事をお姫様のように大切に育てられています。迷子になったりしても探し出せるように手筈は整えているはずです。」

「なるほど……白鷺さん、というのは今日一緒におられた方ですね？」

「そうですよ。」

そう言われて緒方は今日一緒にいた、金髪の少女を思い出す。確かに毅然としていて、風人を引つ張っていた。しかし、評価されるほど強そうには見えなかった。もし襲われでもしたら、一溜りもないだろう。緒方の中の千聖はそのような存在だった。

「失礼を承知でお尋ねしますが……あの少女、白鷺さんはそんなに強い方なのですか？おそらくですが、普通に組手をすれば私が勝てると思うのですが……」

「確かに武の観点から見れば、強いとはとても言えません……一般人に負けるような弱い人では無いですよ。それに白鷺さんは基本的に誰かに屈するような弱い心の方ではありません……任せておけばきつと大丈夫ですよ。万が一の事が起きれば、私も助太刀しますし。」

「強い信頼関係なのですね。」

「私が、勝手に信頼してるだけかもしれないけどね。」

へへっ、と笑いながら風人は語る。今日のやりとりだけでは分からなかったが、この2人には……少なくとも風人の千聖に対する思いは本物だと緒方は確信した。

「話は戻りますが……その事を香奈は知っているんですか?」

「おそらく。この話は有名ですから……むしろ驚きました。風野家の当主なら当然耳に入っているものと思っております。」

「そういった事は父母から聞かされるのですが……現在は離れ離れですので、全く分からないのです。」

「では僭越ながら……これからそういった情報が入った場合、私からそちらに伝えるというのはどうでしょうか。情報の獲得先はひとつでも多ければよろしいかと。」

緒方は提案をもちかける。風人は、しばらく黙ったまま緒方の目を見つめた。その何かを探る目は、先程までの年相応の幼さとはまた違った、大人の目をしていた。

「……失礼。探るような真似をして。」

「いえ、そのような……むしろ安心しました。提案をすぐに鵜呑みにしない所は、やはり場数を踏んだからでしょうか。」

「ついて欲しくない、嫌な技ですけどね。」

苦笑いをしながら、「この技は母から習ったんです。」と話す。顔つきと目線を変える

だけでも、相手に多少の緊張を与えられるという。

「そのご提案、お受けします。しかし良いのですか？見合う対価を示さなくて。」

「私が話すといつても、界限の噂話や動向程度です。それに風野家がどこかと揉めている訳でも無いですから……強いて対価を示すなら、もし私がこの家を解雇されて働き口が無くなつた時は、秘書として雇っていただければと……」

商売人の一面を見せる。無償の条件より、多少の対価を見せた方が話が進むと緒方は方針を変えた。

「ならそういう事にしましょう。よろしくお願いします。」

「ありがとうございます……話しているうちに、就寝時間になりますね。明日また起こしに参ります。では。」

話を一通り終え、緒方は部屋を出る。風人も布団に入り、就寝した。

深夜

「上手くやつたじゃないか、緒方。」

「はい、肇様。」

風人が就寝した後、初めは床の間に緒方を呼びつけ、働きを労った。

「十数年、内部の情報が入ってこなかった風野家……うちが一步他をだし抜けたな。」

「しかし、あの世間知らずさは不安になりますね……」

「それは私も思うところだ。全く、あの家の親はどんな教育を施しているんだ……」
緒方は扇子を閉じ、顎に当てながら思索する。

「風野家とのコネを作るのは、昔から至難と言われる。それに現当主は海外、今はあの子供が当主を代行している。こういった機会でなければ、関係も築けなかった。大義だった。」

「勿体なきお言葉……。しかし、この関係を一体どう利用されるのですか？」
「決まってるじゃないか。」

「ネタを掴んで、いじってやるのだ。」